
流星のロックマン ~共に歩む道~

おりんぽす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン～共に歩む道～

【Zマーク】

N77920

【作者名】

おりんぱす

【あらすじ】

メテオGの事件から一ヶ月・・・

世界の英雄と国民的アイドルのその後の日常を描く物語

第1話 衝撃（前書き）

初めておりんぽすです
ゆくゆくはオリジナル小説を書きたいので
その礎になる作品を描きたいと思います

第1話 衝撃

「それでは、これより記者会見を始めたいと思します」

そこには、サテラポリスである長官と暁シドウ、そして星河大吾の姿があった

淡々と記者からの質問に対応していく中

一人の記者が質問をした、いや一人ではない。ここにいる全ての記者が待ち望んでいたであろう質問だ

「ロックマンの正体は誰なんですか？」

・・・静まり返った中、大吾は答えた

「私の息子である、星河スバルです。」

波紋は徐々に広がり、その場の雰囲気は一変

「JUJUから先は、私から説明させて頂きます」

曉はそう言つとメテオGの事件だけではなく

今までに起きた2度の地球の危機の詳細についても説明していった

無論、この記者会見は生放送である

リアルタイムで放送されていく事実人々は固唾を飲んで聞きいつ

ていた

～「ダマタウン～

一人の少年はこの放送を見て、頭をかかえていた

平穏が音をたてて崩れ去る

「はあ・・・ビリシヨウ・・・」

『いいじやねーか、別によ』

ウイザードオソンしたウイザードはそつ言つ

「笑い事じやないよ、ロック・・・」

少年こと星河スバルは、相棒であり親友であるウイザード、ウォーロックに笑われていた

『お前は、地球を3度救つたんだぞ？そんなに塞ぎ込むことじやないだろ？』

「ひつ・・・もつ僕学校行けないよ・・・」

そう呟くと、一階へと上がつて行つた

星河スバルは、通称ロックマンこと地球を3度救つた英雄である。

スバルの母であるあかねもまた、そんなスバルを見て気に病んでいた

「ロック君 スバルの事お願いね？ それに今日はアレだから・・
ね？」

『任せろ オフクロ スバルは、なんとかしく、それよりあいつ
らは何時来るんだ？』

「多分、夕方になると思つんだけど・・まずはスバルをどうにかし
ないとね」

ピンポーン

「星河スバル君は？」在宅でしょつか？」

大勢の記者がスバルの家に押し寄せ、我先にとインターほんへ質問
を飛びかわす

「あら・・じゃあ、ロック君 スバルのことお願いね」

あかねは、玄関へと向かいスバルは出かけていると対応していた

『さて・・・』

ウォーロックは一階のスバルの部屋へと向かつた

『スバル』 元氣出せ～』

部屋に入りながら声をかけスバルへと近づく

「ロック……僕 どうしたらいいんだろう?」

スバルは、呟く

『どうあるべきあるも、今まで通りでいいだろ!お前はお前だ』

「でも・・・」

『でもはなしだ! あの女だって、お前と同じ立場なんだぞ? 少しは見習え』

『ミニオンちゃんは、国民的アイドルだよ? 僕なんかと全然違ひよ』

スバルは、顔を赤らめながら反論する

『何が違うだ 世界を3度救つた英雄と国民的アイドルに大差なんざないだろーが!』

「とにかく違つたら違つの!」

スバルは、そう言つとベットに入った

無論、寝るためではなく逃げるためだ

何度も言つが、スバルは、地球を3度も救つた英雄ロックマンである

『つたく 往生際が悪いぜ』

ウォーロックは、ウイザードオフしてハンターへと戻つていった

第2話 家族

いつの間に眠っていたのか、スバルは目を覚ました
なんだか、リビングが騒がしい、スバルは時間を確認してから下へ
と降りて行った

「あ スバル君！ おはよー！」

茜色の髪 エメラルドグリーンの瞳 ピンクの服装の女の子は、と
びつきりの笑顔を見せる

「おはよー… ん？ // // ミソラがやん！？！？」

スバルの目の前には国民的アイドルであり初めてのブロガーである
響ミソラがいた。

「ふふ、 スバル君！ 今日からお世話をになりますー！」

ミソラは、スバルに頭を下げる

「え？ か 母さんどうこうこと？」

スバルは現状を理解できずあかねに解答を求める

「ふふ、あのねスバル 実は今日からミソラちゃんがついで居候す
ることになったのよ」

あかねは笑いながら答える

「い 居候？僕知らないよ！」

「そりゃ そうよ、今初めて言つたんだから」

あかねは意地悪く笑つてみせる

「スバル君、私がいたらやつぱり ダメかな？」

ミソラは不安げにスバルの顔を見つめる

「い 嫌じやないよ！ 大歓迎だよ だつて家族が増えるし、ミソラちゃんは僕の一一番大切な人だから…」

スバルはミソラを見つめ返し即座に答える

「え、す スバル君 それって…／＼」

ミソラは顔を赤らめる

スバルは自分で言つた事を思い出した（ミソラちゃんは一一番大切な人だから…）

どんどん顔を真っ赤にするスバル

「あ いや その…／＼」

「スバル君 私ね スバル君のお母さんとお父さんとスバル君の家で一緒に暮らさないか？」

つて言われた時

とっても嬉しかったの だつて私の… 一番大切な人と一緒に居れる
んだもん／＼」

ミソラは耳まで赤く染めながらスバルに自分の気持ちを伝えた

「私 星河スバル君のことが好きです 付き合つてください／＼」

ミソラは赤くなつた顔を隠すように頭を下げた

「ミソラちゃん 顔を上げて？」

スバルも顔が赤かつたが真剣な表情でミソラを見つめる

「僕もミソラちゃんのことが好きです 僕でよかつたらお願ひします／＼」

ミソラは目に涙を溜めながらスバルに抱きついた

「ありがとうございます スバル君／＼」

「うん… よろしくね ミソラちゃん」

「うん… よろしくね スバル君」

一人は互いに顔を赤らめ抱き合つていた

「いいものみせてもらつたわ～」

刹那 空気が凍り 一人は固まる

「」はリビングだ、あかねは全てを田の前で見ていたのだ

「ふふ、よかつたわね スバル ミソラちゃん」

そつ言つとあかねは一や一やしながら台所へと向かった

「今日は」馳走にしないとね 「

スバルはミソラから離れようとするがミソラはスバルの腕に抱き付いていた

『ポロロン、よかつたわね ミソラ』

いつの間にか現れたミソラのウェザードであるFM星人ハープが言った

隣にはぐつたりとしたウォーロックを連れて

「うんー。」

ミソラは笑顔で答える

「あれ、ロック ビビ行つてたと思つたらハープと一緒にだつたんだ」

スバルはぐつたりとしたウォーロックに声をかける が

・・・返事がないただの屍のようだ

『スバル君 ごめんなさいね KY星人は私が拉致してたわ』

屍のかわりにハープはスバルに答える

「KY星人つて…」

『それより、スバル君 ミソラをよろしくね』

ハープは話題を変えた

「あ、うん！ ミソラちゃんはずつと僕が守るよ」

スバルははつきりと答え 自分の腕に抱き付いているミソラを見る

「ありがとう スバル君！」

ミソラは幸せそうな顔だった

「ただいま」

大吾が仕事から帰つてきた

普段より帰つてくるのが早い

「　「　「おかえり（なさい）」」

「あ～ 疲れた む、ミソラちゃん いらっしゃい」

「あ、今日からお世話をなつます！」

ミソラは大吾に挨拶をした

「もう、家族なんだから、自分の家だと思つて生活していいからな

大吾はミソラにしきりに暖かい口調 ミソラは涙を溜め泣き始めた

「ひつ グス…」

あかねはしきりにミソラを抱きしめ

「今までよく一人で頑張ってきたわね、これから私や大吾さんスバルやロック君だって居るのよ？」

たぐわん甘えなさい

あかねはミソラの頭を撫ぜた

「それから、これからは、私や大吾さんのことをお母さん、お父さんと呼ぶ事 わかった？」

「 グス… はい、お 母さん」

もつ言えない事だと思っていた、最後のママはもうこないのだから

それなのに私を家族と思つて接してくれる

そんな星河家の優しさにふれたミソラは、涙が止まらなかつた

泣き終るまであかねはミソラを抱きしめていた

「 も、ご飯にしましょ、う？」

家族4人でご飯を食べるその風景は、本当の親子のようになしか見えなかつた

無論、あかねによつて、先ほどあつた告白は大吾へとバラされ

スバルとミソラは顔を真つ赤にしながらご飯を食べていた

あかねと大吾は終始一ニヤニヤしていたのは言つまでもない

「 お粗末をました」

「 お粗末をました」

スバルは逃げるように部屋へと向かつた

（恥ずかしくて顔上げれないよ…）

ミソラは顔を伏せていた

「 ミソラ スバルのことよろしく頼むな

今日あつたこと（記者会見）でスバルの生活は一変すると思つ ス

バルを支えてやつてくれ

大吾は真剣な表情でミソラに言った

「は はい！」

大吾は穏やかな笑みを作りミソラの頭を撫ぜた

「スバルは幸せものだな」

ミソラは大吾の暖かい大きな手に懐かしさを感じた

「といひでミソラ は部屋どりする？ 一応空き部屋は作つておいたが・・・」

「スバル君の部屋で！」

即答

「ははは、そういうと思つたよ も、スバルの元に行つてあげな」

大吾とあかねは笑つてミソラが一階へと上がりて行くのを見ていた

第3話 お願い

スバルは耐え切れず、自分の部屋へと逃げ込んだ

「母さん・・・ホント勘弁してよ・・・」

全てを暴露するあかねに頭をかかえていた

ふと目に入った物体

燃え尽きたかのように真っ白なウォーロックがいた。否、漂っていた

「あ、ロック ビ ビウしたの？」

『スバル…俺は 愛 がわからねえ…』

延々とウォーロックはハープに愛について説教を受けていたのだろうか？

燃え尽きていた

「はは…ロック、今日はもう休んだら？」

『ああ、 そうするぜ…』

ウォーロックはウィザードオフをしてスリープモードへとはいった

「あのロックがあそこまで…ハープは何をしたんだ…？」

考えるのも恐ろしい…

コンコン

「スバル君、入ってもいいかな？」

ミソラはスバルの部屋の前まできてスバルに聞いた

「あ、うん 入つていいよ」

「失礼しまーす うわ、本がいっぱい有るんだね」

「うん、宇宙関連の本しかないけどね、それに、ミソラちゃんもう
家族なんだから

失礼しますとか いらないよ」

笑つてミソラに言う

「でもね、自分の好きな人の部屋に入るのって勇気がいるんだよ?」

そいつ言うとスバルに抱きつく

「わ、 ヽ(=≡=)ノミソラちゃんーー」

部屋に入るのは抵抗があるのに 抱き付くのは別なのか

「えへへ、いいでしょ 別に／＼」

スバルは心臓が早くなる

「そういえば、スバル君はいつから学校かな？」

「あ、学校はね」

スバルはミソラに説明していく

「ダマ小学校は今長めの春休みにはいつている

スバルは学校側から二学期 つまり夏休みが終わってから学校にきなさい と言われている

つまりスバルは半年間の休学ということになる

これは大吾やあかね、サテラポリスで決めた事らしい

いかに地球を救つた英雄であれ、色々と時間が必要だということだろう

「ふーん、スバル君、半年も休みがあるんだ」「

ミソラは何かを思いついたらしく

スバルから離れ 面と向かって

「スバル君、明日オクダマスタジオに行こつー」

「え、あ、うん、いいよ なんか用事?」

「うそ、ちよっとね」

ミンカラは口をつながら

「お風呂行って来るね~」

下へと降りて行つた

「なんだかひつ? なんかミンカラちゃん企んでる気がする・・・」

スバルのこの予想は明日的中する事になる

「お父さん、お母さん~」

ミンカラはコビングで大吾とあかねに 明日の計画について話していた

「・・・つて感じなんだけど、ダメかな・・・」

ミンカラは不安げに大吾とあかねを見つめる

「ふふ、おもしろいわうね」

「スバルもこれで少しほ度胸が付くといいな」

大吾やあかねは賛成のよつだった

「でも、ここのか？ ミンカラ？」

「うん！ スバル君じゃないとヤダもん」

ミンカラは嬉しそうに言つた

「よし、お風呂に行つてきます」

ミンカラは風呂場へ向かつた

その後、スバルも風呂に入りリビングで話して居るミンカラの元へ向かつた

「ねえ、ミンカラちゃんってビーナで寝るの？」

「スバル君の部屋だよ？」

「えええ、そ たすがにそれは不味いんじゃ……」

スバルは言葉に詰まる

「いいじやん、もう恋人なんだしさーーー」

ミンカラは顔を赤らめる

「う、確かにそうだけど……」

「スバル君、私と同じ部屋嫌なの？」

ミンカラは（泣いたふり）しながらスバルに聞く

「え、いや そんなことないよー。」

「じゃ、部屋に行こいひへ。」

ミンカラは笑顔でスバルの部屋に向かつた

(え、泣いてたんじゃ・・・)

スバルも泣きついでいく

「父さん、母さん おやすみ」

「「おやすみ」」

「スバル ミンカラに変な事しちゃダメよ?」

「し しないよ そんなことない。」

スバルは顔を真っ赤にしながら反論し 自分の部屋へと向かつた

長い夜がやつてくる・・・

第4話 ずっと・・・

「遅いよ、スバル君」

ミソラは頬を膨らまして怒る

(か 可愛い・・・／＼)

スバルは見惚れるいる

「スバル君？」

「つは、な 何ミソラちゃん？」

スバルは慌ててミソラの視線から目を外す

「あのさ…スバル君、今日スバル君と一緒に寝ていい?」

爆弾発言

「だダメでしょ、それはダメ！」

「お願ひ！」

ミソラはスバルを見つめる

「う… 今日だけね?」

スバルは渋々と了承する

「ありがと
」

ベットに入るとミソラはスバルの腕に抱きついた

「//ミソラちゃん 緊張して寝れないよ・・

「だって、こつやつて寝た方が安心するんだもん」

スバルの腕に顔を埋めながら

ミソラは寝息をたてて寝始めた

スー・スー・

規則的なリズムを刻みながら

スバルは今ミソラに腕を掴まれている為、ミソラと向き合っている
状態だ

(やばい・・・ 可愛すぎるーー)

スバルは中々寝つけなかつた

みんな寝静まつた中

スバルは何かに呼ばれたかのように目を開きました

ハンターで時間を確認する、午前4時だ 外は白みがかったいる

何か聞こえる、スバルは声の出所を探す

「行かないで・・・ スバル君・・・ママ・・・」

哀しそうに囁く声の主はミソラだった、頬には涙が伝つた後がある

「行かないで・・・スバル君 独りにしないで・・・」

スバルはミソラの孤独を知っていたつもりであった

両親を亡へし、ただ独りでがむしゃらに頑張ってきた少女がここにいる

スバルはそっとミソラを抱き寄せ、優しく抱きしめる

「僕はどこにも行かないよ ずっと君の傍にいるよ」

スバルはミソラを抱きしめたまま囁くと穏やかな表情になり、スバルもまた眠りについた

僕はずっと君の傍にいるよ、ずっとずっとね

声にならない言葉を胸に秘めながら

第5話 幸せ

「スバル、ミンカラ、いつまで寝てるの 起きなさい」

時刻は8時30分

あかねは一階のスバルの部屋へと向かう

「あらあら、一人とも朝からラブラン

あかねの田の前には

同じベットで抱き合つたスバルと幸せそうな顔をしたミンカラ

「ふふ、ミンカラ、幸せそうね」

『ポロロン、おはよひびきこます あかねさん』

ハープがウイザードオンをして挨拶をしてきた

「おはよ、ハープちゃん」

ハープもまた幸せそうなミンカラの顔を見て微笑んでいた

「何があつたのかしらね~」

あかねは楽しそうに一人を眺める

『実は・・・』

ハープは朝あつた事をあかねに話した
ハープは時々ミソラがうなされていることを知っていた
もちろん、朝方ミソラがうなされているのに気づき、起きていたのである

「ふーん、スバルもやるわね」

『ええ、びっくりしました でも幸せそづ』

「ふふ、もう少し 寝かせておきまじょうか」

あかねはさう言つとハープと共に下へと降りて行つた

「うーん・・・」

ミソラは少し苦しさを感じながら田をあけた

「――！」

スバルが田の前にいる、しかも自分を抱きしめてくれているのだ

(す スバル君に抱きしめられてるー・ビ ビキシヨウ)

自分から抱き付いているならともかく、スバルが抱きしめてくれて

いるのだ

早まる心臓の音がやけに聞こえてくる

ミンカラは考える事やめる

今はただ ここに幸運が長く続けばいい それだけでいい

ミンカラは田を開じ自分の唇をスバルの唇へと近づけた

パチッ

スバルの目が開く、目の前にあるのはミンカラの顔

スバルは状況が読み込めない

口を開けようと田の唇によって塞がれている

数秒後

ミンカラはせりつと田を開ける

「……」

スバルと視線が合つ

ミンカラは慌ててスバルから離れる

「ミンカラちゃん い 今のは……」

「…私のファーストキス　『めん…　嫌だったかな…』」

ミソラは俯く、声には元気がない

スバルはミソラを抱きよせる

ミソラは一瞬ビクついたがスバルに身を委ねた

「嫌じやないよ、ちょっとびっくりしただけよ」

ミソラはまだ元気がない、スバルはミソラを自分に向かわせると、すかさずキスをした

「えへへ、仕返しだよ」

スバルは顔を赤らめながらミソラに囁く

「…スバル君　ずるい」

赤くなつたミソラはスバルの胸に自分の顔をつずめる

スバルはミソラが元気になつたのを確認すると

「や、起きようか?　ミソラちゃん」

「うん」

スバルとミソラはリビングへと降りて行つた

「「おはよっ」」

「「おはよう」」

大吾とあかねは一やついている

無論、あかねは大吾についてさつきあつた出来事を話している

スバルとミソラは顔を真っ赤にしながら 朝食を食べた

「さ、そろそろ行こうか ミソラちゃん?」

「うん!」

準備を終えた一人は、大吾とあかねに一言告げ、オクダマスタジオへと向かつた

ウェーブライナーの中で、ミソラがスバルの腕に抱き付いていたので

視線が痛かった のは言つまでもない

第5話 幸せ（後書き）

一気に5話こなしました。

感想 よかつたらお願ひします

第6話 企みの真相（前書き）

ウォーロックがまったく登場していません
忘れていたという訳ではありませんよ！

第6話 企みの真相

「あ、ミソラー。」

ミソラに気付きスズカが手を振つてやつてきた

「スズカ！ 久しぶり～ 元気？」

他愛もないガールズトーク、スバルは疎外感が半端ではなかつた

20～30分経つたのだろうか

スズカはスバルにやつと氣づく

「あれ、スバル君だ！ どうしたの今日は？」

「ミソラちゃんの用事を済ませにかな？」

若干いじけていたスバル

「用事？ あ、ミソラ もしかして、スバル君をドラマの相手役にする気じゃないよね」

「うん そのつもり～」

「はい？」

スバルは意味を理解できない

「ミソラの相手役? なんだそれは

「スバル君、私に付いて来て」

「ミソラとスズカに連れられて、オクダマスタジオの中へと入つていへ

監督と思われるワイザードとミソラは話しをしている

「ねえ スバル君、ミソラと付き合つてゐる? ホント? 」

スズカは先ほど聞いた話をスバルにも尋ねる

「うん、ホントだよ」

ちょっと恥ずかしそうに答える

「ふーん、そうなんだー もうがミソラだな、世界の英雄ロックマンが彼氏なんて!」

笑いながら からかう

「僕は英雄なんかじゃないよ…… ただ守りたい人を守つただけだから……」

謙遜するスバル、ただただ みんなを…ミソラちゃんを守りたい一心で

戦い抜いたためか世界の英雄と呼ばれることに抵抗を感じる

「ミソラは幸せだなー あ、そろそろ仕事だ それじゃあね、スバ

ル君！」

ズズカはそう言つた後、走つて行つてしまつた

(大変だなあ アイドルは)

スバルは感心していた

「スバル君～ こっち来て～」

スバルはミソラの元へと向つ

「君が星河スバル君か」

監督ウイザードはスバルをまじまじと見る

2～3個質問を受けた

何でそんな事を？と思つような質問だったがスバルは答える

・・・

「よし～ 稲にじょり～」

「ホントですか～？」

ミソラは嬉しそう監督に詰め寄る

「つむ、ミソラから聞いた話と直に会つてみて誠実さがわかつた」

「あの～？ なんの話しかわからないんですけれど？」

恐る恐る尋ねる

「実はだ、ミソラをヒロインとしたドラマを作るのだが、相手役が決まつていなかつたんだ」

「え、つまりその相手役は僕つてことですか？」

「お願いしたいのだが、どうかな？」

スバルは黙り込む

ただでさえ、昨日の記者会見で自分の正体がばれて大変なのに

ドラマなんかに出たら大変な事に…

「スバル君 お願い！」

ミソラは懇願する

「…わかつたよ ミソラちゃん

僕なんかでいいんでしたら お願いします」

スバルは頭を下げる

「よろしく頼むよ、でわ」「けいら」…

スバルは監督に連れられ事務室へと向かった

撮影期間は三ヶ月、他にも色々と説明を受け

明日から早速撮影という事になつた

「はあ～ まさかドラマに出る事になるなんて・・・」

「いいじゃん いいじゃん」

がっくり肩を落とすスバルに対し ミソラは上機嫌

二人は家に帰りスバルは、あかねと大吾に

ドラマに出演することになつた事を伝える、が一人は驚かない
どうやら事前にミソラから提案を受けていたらしい

(昨日の予感はこれだったのか・・・)

スバルは思い知る

「スバル、スタッフさんやミソラに迷惑をかけるなよ?」

「…わかってるよ」

スバルは自分の部屋へと向かつた

ミソラも後に続いていく

「スバル君、ホントにだいじょぶ？」

心配そうにスバルの隣に座る

了承してくれたが、半ば強引に決めてしまつたような事だったので

スバルの様子を見てミソラは不安になる

「うん？ 何が？」

「何つてドリマだよ、嫌だったら断つても良かつたんだよ？」

「自分の意思で決めたから、大丈夫だよ」

スバルはミソラの頭をなでる

「ありがと、心配してくれて」

ほんのり頬を赤めながらスバルの腕に抱きつく

「えへへ」

「ミソラちゃん、これから色々みじくね」

「うん！ 任しといて！」

「スバル／ミソラ／『飯よー』

あかねに呼ばれ、二人はリビングへと降りる

夕食時の話題はもちろん ドラマの話

あかねとミソラは盛り上がりっていた

夕食後はスバルとミソラが交代でお風呂へと入った

「さ、明日から忙しいんだから、 今日はもう寝なさい」

「はーい」

二人は部屋へと向かった

「スバル君、今日も一緒に寝ていい？」

「え、きょ 今日も？」

「うん、スバル君の傍だと安心するんだ、ダメかな？」

ミソラはスバルの布団の傍にちょこんと座り、見つめる

スバルは朝方あつた事を思い出す

行かないで・・・

「いいよ、大丈夫だよ ミソラちゃん、僕はどこにも行かないから
」

スバルはミソラの胸中を察しミソラを抱き寄せる

いつも鈍いスバルだが、ミソラの事となると勘が鋭いのであった

「ありがとう、スバル君」

ミソラはスバルの腕に抱き付けながら眠りについた

ミソラが眠りに付いたのを確認してからスバルもまた眠りについた

第6話 企みの真相（後書き）

デハラマについては番外編を作りたかったと思っています

～番外～ ウォーロック編（前書き）

ウォーロックとハープを視点とした話です

「番外」 ウォーロック編

ピンポン

今日何度目のチャイムだろう

あかね
は玄関へと向かう

記者がと思っていたか今田から来る新しい家族だった

「今からお世話をになります」

ミソラとハープはあかねに挨拶をする

「いらっしゃい、ミソラちゃん、ハープちゃんさ、上がって」

お邪魔します」

「お邪魔します
じゃないでしょ?」
あなたは今日から家族なん
だから

家に帰つてきたら
”ただいま”
でしょ？」

え、あ、た、ただいま・・・

「はい、お帰りなさい」

あかねは 暖かくミソワを迎えてくれた

懐かしい響き

(お帰りなさい か・・・)

『お、やつときたか

ウォーロックが降りてきた

『あらあら、待っててくれたの ロック?』

ハープはウォーロックをいじりはじめる

『ツケ、何言ひてやがる、俺はおもしろい事になりそつだから 待つてたんだ』

『はあ… ホントあなたは、ガサツね~』

『ああ!? 誰がガサ 「ロック君、ダメよ、すぐ喧嘩しちゃ」 せんかひ』

あかねがウォーロックを止めようとする

『だいじょぶですよ あかねさん ロックどじゅ もなりま
せんかひ』

『何だと…』

『何よー!』

・・・・・ そんなやりとりがスバルが起きてくるまでずーーつ
と続いていた

あかねとミソラは、最初こそ止めに入ったが無理だと感ずると

二人?を放置して会話を始めた

スバルが2階から降りてきた

ハープは直感で何かを感じウォーロックを連れて展望台へと向かった

『なにしゃがる! ハープ』

『ポロロン、邪魔はさせないわよー!』

『邪魔つて何がだ!』

『ミソラとスバル君のよー!』

『俺が何時邪魔したって言つんだ』

『あなたは居るだけで邪魔になるのよー!』

ミソラの恋路は邪魔させないわー!』

・・・

『分かる? ミソラはスバル君の事が好きなの』

『好きってなんだ?』

『好きっていうのは、その人の事ばかり寝ても覚めても気になる」と言うのよ!』

『なんだそんな事が、俺は刑事ドラマが好きだぜ!』

・ちよっと違わないか? ウォーロック

『はあ……そういう 好き 嘘はないのよ!』

『じゃあ、どうこう 好き 嘘なんだよ』

『//この 好きは 愛 のよ』

『愛だ?』

『愛よ。』

・・・3時間後

『わ わからねえ……』

『だから、戀つて言つたのよ……』

何度もなのか分からぬほどウォーロックは、ハープから 愛 に
ついて説明を受けていた

ついにウォーロックは燃え尽きた

真っ白になつたウォーロックを連れてハープは家へと戻る
(愛 つてなんだ… 愛つて…)

ウォーロックが立ち直るのは一週間かかつたとか・・・

スバルとの間にある絆は友情

スバルはミソラを守りうと必死になる

ウォーロックもまたスバルの為とミソラとハープを守る

ハープを守らうとするのは結果的にミソラを守りたいとするスバル
の為だと思っているが

自分では気付いていない ハープ を 守りうとする気持ち

まだ、気付いていないだけ

自分が、知らず知らずのうちに、ハープを気にしている事を

ウォーロックがこの気持ちに気付くのはまだまだ 先の話

～番外～ ウォーロック編（後書き）

ウォーロックが登場していなかつた訳ですが
こういう事でした

是非 感想お願いします！

第7話 あつとい聞

こうして、時には朝早くからの撮影に追われながらもついに、最後の撮影が終了した

文字通り怒涛の三ヶ月が終わった

スバルは元々受けた事は何事も熱心に取り組む質なので台本練習は毎日欠かさずソラと取り組んでいた

その回あつてか、スバルは初めてにしてはNGが少なかつたらしい

ドラマ“流星の出会い”は平均視聴率40% 最高視聴率62%を記録した

今は打ち上げ

監督が首頭をとる

『え、無事撮影を終えました、みなさんお疲れ様でした

それでは、無事撮影が終わった事を称して 乾杯！』

『乾杯！』

スバルとソラは子供なのでもちろんジュース

二人は互いのコップをコシンと音を立ててぶつけ合う

「ふ、全部終わったね！スバル」

「うん、そうだね お疲れ様 ミソラ」

二人は撮影の影響か、いつの間にかお互いを呼び捨てで呼び合っていた

撮影中のNG話で二人は盛り上がっていた

・・・

『スバル、もう結構な時間だけど、だいじょぶか？』

ウォーロックが話かける

「え、あ、ホントだ、そろそろかえろっか ミソラ」

「うん！」

二人は監督やスタッフの人達に挨拶にいき、帰路についた

「「ただいま」」

「「おかえり」」

あかねと大吾は一人を出迎える

「お疲れ様、スバル、ミソラ」

大吾は、ぽんつと一人の頭に手をのせる

「さ、風呂にでも入って、今日はもう休みな」

「「はーー」」

スバルとミソラは交代でお風呂に入った

「すっかりスバルもテレビ慣れしたもんだなあ」

大吾は感心する

「ミソラのおかげね」

「ああ、そうだな」

三ヶ月前のミソラの提案が功を奏した

「ふ~すっきりした~」

『ホント、いいお湯だったわ』

髪をタオルで拭きながら、ミソラがリビングへとやつてきた

あかねと大吾は、自分達の間にミソラを座らせた

「ミソラ ありがとな、いつもスバルを支えてくれて」

「え、そんな… 私の方が支えてもらつてますーー

顔が赤くなる

ぽん

大吾はミンラの頭を撫でた

大きく暖かみのある手

ミンラは笑みがこぼれる

「あ、今日はもうお休み 疲れただろう?」

「うう セウスル、お父さん、お母さん おやすみ

「 「おやすみ」 「

2階へと上がつて行つた

『スバル、寝ないのか?』

「あ、うん 寝るよ、でもミンラがまだだしさ

『つけ、すつかつミンラと寝るのが板に付いたな

スバルはミンラと同じベッドで寝るよ!になつた

毎晩毎晩お願いされ、ついに根負けしたのである

が、嫌な訳ではないので断る理由もない

この3ヶ月でスバルとミンラの仲は深まっていた

「うぬせこよ ロック」

スバルは言い返すが決して反論はしない

「スバル~ 寝よ~?」

ミンラは部屋へと入り、ベットへと向かった

「寝よっか、じゅ、電気消すよ~?」

「うん」

スバルはミンラが布団に入ったのを確認すると電気を消した

「スバル 明田さ、久しぶりにデートに行かない?」

撮影が忙しくて四六時中スバルとミンラは一緒にいたが、デートにこそ行けなかつた

「デート? ビビ?»?

「とにかくデートしよう、場所は明日決めよう。」

「わかった」

ふあ～ スバルは大きな欠伸をかいた

ミソラもつられて欠伸をした

「欠伸 うつった！」

「はは、 ホントだ」

二人は眠りについた

第8話 テート

「スバル 朝だよ！ 起きてー」

ミソラのソプラノボイスがスバルを呼ぶ

「うーん… おはよー ミソラ」

朝早い撮影があったおかげか、スバルは声をかけられるとすぐ起きれるようになっていた

が、眠いものは眠い、ベットから上半身を起き上げていたが、ビニカぼうっとしていた

「ほら、スバル 『ご飯食べて、早くテートに行こう』

「やうだね

スバルは着替えてからビングヘと降りて行った

あかねと大吾に挨拶をする、二人はもう既に朝食を済ませたらしく

スバルはミソラと一緒に朝食を食べた

「そえば、ミソラ 今日はビニカ行くの？」

「うーん、スピカモールに行かない？」

「うん、いいよ」

「あー、今日は『テート』でもするの?」

あかねが楽しそうに聞いてくる

大吾 はソファーに腰を下ろしながら

「はつはつは、久しづびりの休日なんだ、楽しんでこよ」

「「うん!」」

二人は朝食を済まし、スピカモールへと出かるため家を出た

家を出て数歩

『ポロロン、ミンカラ変装しなくていいのかしら?』

『スバルもだぜ?』

ハープとウォーロックが尋ねる

「「あ」」

二人は家へと引き戻った

どうもスバルとミンカラは自分達が有名だということを自覚しきつていならしい

『まつたく、危なつかしいやつらだ』

『お互いに夢中なのよ』

・・・

二人は家へと戻り服装を変えた

あかね と 大吾は 家を出て数十秒後の帰宅に驚く

「忘れ物？」

「うん、変装するの忘れてた」

スバルとミソラは一階へと上がって行った

「ふふ、お互いに夢中なのね」

あかね は楽しそうに笑う

大吾も連られて笑う

・・・

スバルは、黒のジーンズに赤いチャックのポロシャツに

普段はかぶらない帽子をかぶっていた

対するミソラは、水色のワンピースに伊達メガネ、さらりと髪を左右にリボンで結んでいた

(か・・可愛い)

スバルはミソラに見惚れる

「さ、 行こ」

二人はウェーブライナーへと乗り込みスピカモールへと向かった

ミソラはスバルの腕に自分の腕を絡ませる

今までのスバルなら真っ赤になつて抵抗の素振りを見せるが、スバルは成長していた

抵抗する素振りを一切見せず、顔も赤くなつていない

周りの視線が集まるが、物ともせずミソラと腕を組んでいた

「スバルさ、全然視線とか気にしなくなつたよね」

「そりや、撮影で慣れるよ

それに、ミソラとこうしているのは嫌じゃないから、なおさらねー。」

えへへ と笑うスバル

ミソラは顔が赤くなる

『よかつたわね』 ミソラ

ハープが茶化していく

「もう！ ハープつたら／＼」

そういう言つてゐるうちに目的地へと着いた

ミソラはスバルを連れて洋服店などを回つた

今一人はベンチに腰を下ろして、アイスクリームを食べていた

広告塔にはミソラとスバルのツーショットが映し出されていた

「周波数がピッタリ！」

なんて文字が映し出されている

この前、ミソラが記者にスバルとの恋愛関係を暴露したためだらう

さすがに恥ずかしくなったのか、一人はベンチから腰を上げて

ショッピングモールへとまた向かつた

第9話 記念（前書き）

2話続けて投稿です

第9話 記念

スバルとミンラはジュエリー店を見ていた

ミンラの足が止まる

「あ、これ可愛い…」

「ん、何?」

ミンラはショーケースに展示されている

音符の形をしたネックレスを指差した

ペアネックレスなのか対で展示されていた

スバルは何か思いついたらしく

「ちょっと待ってて」

ミンラは言われる通り後ろを向く

「お待たせ〜 ミンラちょっと後ろ向いて?」

ミンラは何かをかけられたのを感じた

「スバル、これ…」

「あ、うん 僕達さ、よく考えたら、付き合つてから始めの『テート
でしょ？

だからさ、初『テート記念にね』

スバルは自分の首にもネックレスをかけて照れくさそうと言つ

「ありがとう、スバル」

ミソラは嬉しくなつてスバルに抱きつく

勢いがありすぎた

スバルの変装用の帽子が取れてしまつ

「あれつて…星河スバルじゃない？」

「つてことは、隣の子はミソラちゃんだ！」

ツンツン髪を見られただけで正体がばれてしまった

(ま まづい・・)

スバルは慌てて帽子を拾つ

『スバル、電波変換だ！逃げるぞ』

スバルは電波変換した

ミソラを抱きかかえるとその場から去った

展望台で電波変換を解く

「ふ～ 危なかつた… ありがとう、ロック！」

『つへ』

スバルはお姫様抱っこしていたミソラを降ろす

「「めんね、スバル」

ミソラは自分が嬉しさのあまり抱き着いて

変装の帽子を落としてしまった事を気にしていた

「気にする」とないよ あ！ 夕焼けが綺麗だよ ミソラ

「え、 うわ～ … 涼い綺麗」

地平線を茜色に染める、どこまでも どこまでも・・・

ミソラはふと、スバルを見る

夕日に照らされて大人びて見える

どこか自分の届かない存在ではないのかと

隣にいるはずなのにそんな風に思つてしまつ

「スバル・・」

「ん?」

ミソラの顔がスバルに迫る

二人の影が重なる

「えへへ／＼　さ、帰ろうスバル！」

ミソラはスバルの腕を引っ張っていく

「うわ、　つと　ちょっと引っ張らないでよ　ミソラ」

「早く　早く！」

スバルとミソラは家へ向かって駆け出す

日はすっかり暮れてしまった

赤紫色の空を流れ星が一つ流れた

第9話 記念（後書き）

いかがでしたか？
感想お願いします

余談ですが今日はポッキーの日ですね

第10話 目覚めたら

スバルは目が覚めた

「うーん..」

伸びをしながら

隣を見る、そこにはミソラの姿...があるはずだった

ミソラが寝て居たであつた場所を触る、温もりはない

「あれ、ミソラ もう起きたのかな?」

スバルは着替えを済まし

リビングへと向かう

あかねに挨拶を済ませ、ミソラの姿を探す

「あそん ミソラは?」

「あひ、降りてきてないわよ?」

あかねは、何を言つてるのよ つと言つた様な顔で答える

「え?」

スバルは不安に顎られ、部屋へ急いで戻る

「//ツイー.」

扉を開けるのと同時にスバルはミンラを呼ぶ

・・・

返事がない

「ロック!」

『なんだ?』

「ハープを探して!」

『ああ!? なんで俺がハープなんざを』

「いいから!」

ウォーロックの言葉を遮って、ハープの電波を探させる

ミンラが傍にいるからだ

『ビリにも反応がないぜ』

ウォーロックは答える

「ビリも?」

『おつ、ビリもまだ』

不安で胸がいっぱいになり、最悪な展開が頭をよぎる

ミソラ…

スバルはリビングへと降りて

ミソラを探してぐると言つて、家を飛び出た

ミソラが居るかも知れないといつ心当たりを手当たり次第に探した

時刻はもう昼

スバルは最後の望みである展望台へ来ていた

誰もいない

「ミソラ… どこなんだ…」

もう行くあてなど浮かばない

ベンチに腰を下ろす

朝から何も食べてないせいか、お腹が鳴る

『スバル、一旦家に戻つて飯を食べた方がいいんじゃねーか?』

ウォーロックはスバルを気遣う

「…一旦、家に戻るうか」

スバルは家へと向かつた、足取りが重い

「ただいま

「おかれり」

あかね はスバルを出迎える

「ミソラ、どこに行つたんだろ？…

事故とかに遭つてないよね？ 何かあつたら、僕は…僕は…」

スバルは取り乱しながら、胸の内をあかねに打ち明ける

さすがに、これ以上は…と思つたのか

ミソラが2階から降りてきた

「スバル」

え？ スバルが声の方を向く

そこに ミソラ が居た

「ミソラ…どこ行つてたのさ 心配したんだよ」

ミソラ に詰め寄る

「あのね、スバル、実は…」

「ミソラ、あかね、ハープ、それにウォーロックまでもが共犯でやつていたらしい

始まりは、ミソラが

もし私が急にいなくなったら スバルはどうするのかなー? から始まつた

朝食を食べながらミソラは、あかねとハープに聞いた

「どうせなら やってみよう、なんて展開となり 今に至る

スバルは半ば呆然としている

あかねとハープは、予想通りの展開だったので楽しそう

ウォーロックは案の定、おもしろそうだったから

と協力していたらしく、スバルを見て笑っている

ミソラは上機嫌だ

あんなにもミソラを心配してくれるスバルを見て、素直に嬉しかった

全てを理解したスバルは安堵する

が、ここからスバルの逆襲が始まつた

第1-1話 仕返し

スバルは空いていた口を閉じて、少し考え込む、やがて

「ミソラ… やつてもいい事と悪い事があるのは分かるよね？」

低い声でミソラに囁く

内心、ミソラが無事だとわかった事が何より嬉しかったが

やり返さないと気が収まらないのまた事実

「ううん」

「じゃあ、僕がどれだけミソラを心配したと思ひ？」「これってやつていい事かな？」

「そ… それは… う… ごめん」

怯えながらミソラは謝る

無論、スバルは怒った振りをしてくる

「… 僕 出かけてくるね」

スバルはそういう残し家を出た、勿論、行き先は展望台

…

「ど どひじよひ…」

ミソラは涙目になりながら、ハープに意見を求める

『やりすぎたわね ミソラ、いつもは怒らないスバル君が怒るとなると大変ねえ…』

「そうええ、私もスバルが怒ったのを見るのは初めてかもしれないわね」

あかねは腕を組み顎に手を当てて考える

「これは、素直に謝つた方がいいわね」

『やうですね ミソラ、スバル君は展望台にいるわよ どうするの?』

「行こう ハープ」

ミソラはスバルを追つて展望台へ向かった

ピローン

あかね のハンターが鳴る

スバルからのメールだ

「ミソラに仕返しするから協力してね、あと怒つてないから大丈夫
!」

メールを見て 田を丸くする

あの スバル が <仕返し> か

「ふふ、ミソラも大変ね」

あかね は笑う

「今日はスバルの好きなハンバーグにしようかしらね
晩御飯の食材を買いにあかねは出かけた

スバルはウォーロックを連れて展望台へ来ていた

「ち、ロック ミソラに仕返しするから手伝ってね!」

『あん? お前怒つてたんじゃないのか?』

ウォーロックは首をかしげる

「怒つてないよ、 ただ、なんか ミソラ にやられっぱなしつて
のは嫌だからね」

たつた三ヶ月の撮影だったがスバルの演技は

あかねやミソラ、ハープ、ウォーロックにさえ気付かれていなかつた

『おもしろそーだな、で、俺は何をすればいいんだ?』

「あのね…」

スバルはウォーロックに指示を伝える

ミソラは息切れしながら 階段を登つた

スバルは手すりに肘をつけて空を眺めてる

スバルがミソラに気付く

「ス スバル あの… さっきせざ「めんなさい…」

ミソラは頭を下げて謝る

「スバルが、私の事どう思つてるの気になつて…それで、その…」

「許さないよ

ミソラは氷つく、「許さないよ」何度も頭の中で木霊する

『ス スバル君 今回のは…』

『ハープ、てめえーはこつちにきやがれ

ウォーロックがハープの話を遮つてどこかへと連れて行く

ミソラは涙を溜めてる、泣かないよう必死に堪えていた

「ス スバル…」

涙を堪えるのに必死で言葉が出て来ない

「ミソラ、今どんな気持ち?」

「グス… スバルが、居なくなると思つと… グス… 怖いよお…」

ついに堪え切れなくなつて、涙が頬を伝つ

「うん、そうだよね? 僕は朝起きてミソラが居なくて

探しても探しても居なくてすごい不安だつたんだ、どう わかつた
? 僕の気持ちが」

ミソラは 「クリ」と頷く

「もひ、こんな事しない?」

ミソラは頷く

「よし、じゃあ許してあげるー。」

スバルは笑顔でミソラを抱きしめる

ミソラはスバルの胸で泣いている

(うーん、やりすぎたかなあ?)

流石にスバルも反省して、ミソラの頭を撫でる

ハープとなぜか傷だらけのウォーロックが戻ってきた

『ミソラ、スバル君に仕返しされたわね』

「もう、こんな事しないもん！」

目を真っ赤にしたミソラは答える

「さて、帰ろうか ミソラ！ 僕朝から何も食べてないからお腹す
いちゃった！」

泣きすぎたためか、目が真っ赤になつたミソラを連れてスバルは家
へと帰つた

テーブルの上にはハンバーグが並べてあつた

いい匂いだ、ぐー スバルはお腹が鳴る

「もうちょっと待つてね、スバル」

あかねはキッチンからスバルに声をかける

ミソラもキッチンへと向かい あかね の手伝いを始めた

スバルはその風景を見ながら 微笑む

晩御飯のハンバーグは美味しかつた

お風呂に入り、今はベットの布団の中
隣にはミンラがいる、いつの間にか当たり前のようになっていた
ミンラが居るのを確認すると スバルは安心して眠りについた

第1-1話 仕返し（後書き）

そろそろスバルの復讐をせようかなと思つています

余談ですが

作者は明日 稽学生試験の集団面接があるので2回しか練習をしていません！

なんとかなるやー。明日頑張りますー

第1・2話 復学（前書き）

昨日話した通り復学させます！

第1・2話 復学

休学中の半年間は、様々な事があった

ドラマに出演した事、ミソラとたくさん、デートをした事

時には、ミソラの悪戯に頭を悩まされた事もあった

スバルは今日からコダマ小学校への復学だ

一ヶ月間で、遅れていた勉強は取り戻した

勉強の遅れに対する不安はないが

みんなが自分を忘れてしまっているのではないか、という不安がある

スバルは今、教室の入り口、つまり廊下にいる

どこか地に足が着いていない、ソワソワした感じがする

「え、今日から学校に復学する生徒がいる、入ってきなさい」

先生がスバルを呼ぶ

スバルは深呼吸を一回すると教室へと入った

ガラガラ

【おかえり～！】

委員長」と、白金ルナを先頭にキザマロやコンタ達は、スバルを出迎える

黒板には、おかえり！ 世界の英雄 と書かれていた

目頭が熱くなる

「ただいま！」

半年振りの再会だ

「スバル君！ 勉強はしてきたんでしょうか？」

ルナは尋ねる

「あ、うん、勉強はちゃんとしてきたよ！」

スバルは笑顔で答える

「じゃあ、なんで私達に一切会いにこなかつたの？」

・・・

(忘れていたなんて言えない…)

スバルは表情こそ変わっていなかつたが、内心滝のよつた汗が出ていた

(やばー、やばー、やばー、どうじょー!)

・・・

「こや、なにかとおしゃれ…」「あんな

#苦し紛れの返答

「ふーん、忙しかったのね、それは向かひら、ミツカラヤさんのかじりでかじりへ。」

いつの間にか、ルナの笑顔から優しさは消え、黒いオーラが吹き出でている

キザマロや「ンタ達は、一歩下がつてこの

(#めすこ、#めすこ、#めすこー)

スバルは追い込まれた

「え、や、そんな事ないでや」

フレッシャーに負けてか敬語になら

「へえ、じゃあ、昨日なんでもうかわさべトークしたのかじり

？」

「……」

「み…見てたの?」

ついに表情までもか真つ青になる

「やっぱり、デートしてたんじゃないの！」

はめられた、スバルは、ルナの誘導尋問にまんまと引っ掛けた

ついに、スバルは観念する

「スマセン！」

スバルは神速のスピードで土下座をした

さすがに、土下座までされると思つていなかつたのか、ルナはたじろぐ

「『委員長』もひ、その辺こじとけ（しどいてあげたらっ。）」「

声が重なる

「…もう、いいわ スバル君」

ルナはスバルに頭を上げるよう促す

「今はまあ、私達の事を忘れていたと言つことは、なかつた事にしてあげるわ

（はあ…良かつたあ…）

スバルはほつと胸を撫でる

「放課後、ミソワちやんとの関係を説明してもいいから、覚悟しない」

ビキッ

先ほどより、まずい状況に追いやられたことに気付くスバル

「ははい…」

ルナは自分の席へと戻つていった

(どうして こうなった…)

肩をがつくりと落とす

「「スバル（君） どんまい だ（です）」」

キザマロと「ンタは、おもて労いの言葉をかけ、スバルの肩にぽんつと手を置く

第13話 再開

気分が重い

「はあ…ん、あれ？ そういえば、さつき委員長を止めてくれた
声って…」

スバルは委員長を止めてくれた、存在の事を思い出した

「スバル君！ 久しぶりだね！」

「え、ツツカサ君？」

「うん！」

緑の髪をしたツカサこと、双葉ツカサは

随分前に、ヒカルとの和解の旅に出ていたはずだった

「ツカサ君、ヒカルとは和解出来たの？」

「うん、僕はヒカルと共存していく事を決めたんだ」

ツカサの目に宿る強い意思をスバルは見た

「そつかー、ヒカルと和解できたんだあ、おめでとう！ ツカサ君

「

スバルは心の底から喜び、また祝福する

「ありがとう、スバル君のおかげだよ」

「そんな、僕は何もやつてないよ・・・」

「スバル君と友達になれたから・・・

それが僕にとって、一番大切な事だつて事を教えてくれたんだ」

スバルは照れくさそうだった

「スバル、俺からも礼を言わしてくれ」

「あ、ジャックじゃないか！」

黒髪のツンツン髪、ジャックは照れくさそうに、頬を搔きながら
言つ

「あの時（メテオGの中）、お前に生きる道を教えてもらつてなけ
れば

俺はここにはいねえーだから、その…サンキューなスバル！」

スバルは嬉しさで胸がいっぱいになる

友達になりたいと思った 人たちから

こんな風に言われるとは思つていなかつたからだ

「ツカラ君、ジャック、ブランザー結ばない？」

スバルは一步踏み出す

「俺はいいぜ」

ジャックは嬉しそうに笑う

「スバル君、僕は…」

「過去は関係ないよ、これからを…、今を大切にしていこう?」

スバルはツカサに手を差し伸べる

「ありがとう、スバル君」

ツカサはスバルの手を取る

そして、3人はブラザー契約を結んだ

久々の授業は新鮮だった

お約束ともいえる、ゴンタの宿題を（やり）忘れました

クラスは爆笑

「牛島、ホントなんだな？ 家に忘れてきただけ、なんだな？」

「おおう、そうだぜ？」

「そ、うか、じゃあ、明日必ず持つべきなさい、明日提出しなかつたら宿題を倍にするからな」

先生は ゴンタを脅す

「りょ 了解したぜ」

見慣れていた光景も半年居なかつただけで新鮮だつた

学校が楽しくてしょうがなかつた

- 放課後 -

スバルは帰ろうとする

大事な 命令 を忘れて

「スバル君、ちょっといらっしゃい」

・・・

(忘れてた…)

「は はい…」

ルナに連れられて行く スバルを 4人は見送った

「 「 「 「 頑張れ スバル（君）」」」

スバルは、屋上で正座をしてルナに説明をした

軽く1時間が経った、やっと納得したのかルナから開放された

黒いオーラは留まる所知らない

逃げるようにその場から去った

一人屋上に残つたルナの頬には、涙が伝つた後があった

スバルはやつれた表情で帰路につく

「つ 疲れた……」

『クツクツク、スバルもあの女には勝てねえな』

ウォーロックは笑う

反論する気も起きない

スバルは家へ着くと、倒れこむようにベットで眠つた

第14話 待ち人

スバルが学校で授業をしている間、ミソラは新しいCDの打ち合わせをしていた

新曲のレコーディング作業に追われるため、今日の帰宅は深夜頃になる

今は休み時間

「はあ、スバルに会いたいなあ」

ミソラは咳く

『早く終わらしたら、すぐにスバル君に会えるわよ、早く終わらしちゃいなさい』

「分かった！」

ミソラは張り切って、仕事に向かつた

『健気な子ね』

ハープは微笑む

スバルは目を覚ます

時間は21時

「うわー 寝たなあ…」

帰ってきたのが17時だから4時間は寝てる

スバルはリビングへ降りた

あかねと大吾は、ソファーでテレビを見てた

「あれ、ミソラはまだ帰つてないの?」

「今日は、打ち合わせだから、帰りが遅いらしいわよ」

あかねは答える

「そうなんだ」

テーブルの上に並んである、おかずとお茶碗 2つ

スバルは寝ていたので、まだ、ご飯を食べていない

「ん~ なら、ミソラを待つてようかな、寝て 眠くないし」

スバルはそういうと腰を下して、テレビを見る

「ふふ、せっぱつ、ミソラを待つのね

あかねは今日も楽しそう

大吾に座つては「やつこ」こと

時刻は22時

「ん~ 終わったあ！」

ミソラは伸びをする

『や、帰つましょ「うか』

「うん..」

ミソラはスタッフさんに挨拶を終えると帰路についた

「ただいま~」

「「「おえり~」「」」

3人はミソラを出迎える

あかねはおかずを温めなおし、『飯を盛つた

「あれ、スバル、まだ起きてたんだ」

「うん、『飯もまだなんだ、早く食べよう~』

「うん..」

二人は楽しそうにご飯を食べた

気を利かしたのか、あかねと大吾は自分達の部屋へと戻っていた

その後、二人はお風呂に入り、布団の中へと潜つた

ミソラとスバルは、今日あつた事をそれぞれ話す

一通り話終えた後、二人は眠りについた

布団の中で一人は手を繋いでいた

第14話 待ち人（後書き）

どうでしたか？ 感想お待ちしています

ドラマ編の番外を、ぱけぱけ書いつかないと思っています！

第15話 日常と提案

すっかり普段の日常に戻ったスバル
いや、日常は少し変化したのだが…

スバルは、世界の英雄であり、人気ドラマのミソラの相手役もやつたのだから

休み時間は、ひっきりなしに他学年の生徒に詰め寄られている

これが、今の彼の日常 なのだ

ミソラ曰く、慣れれば平氣だよ だそうだ、慣れとは凄いものだ
何人目かわからない程の握手を終え、スバルは委員長達と昼食を取つた

ルナ達も、もう既に慣れているのが、スバルに詰め寄る生徒に一々感心を示さなくなつた

「ん~ もう秋だね~」

スバルは窓枠に肘をついて、山を見る

季節はもう秋、山は紅く染まり、夕暮れの時間も日々早まつていた

「星河君」

ルナが呼ぶ

いつの間にか、ルナは、スバル君から 星河君 と呼ぶようになった

「何、委員長？」

「来月の10月に3連休があるでしょう？ その日に旅行に行くわよ」

なぜ語尾に？がない それはもう命令形だ

「ん、なんていきなり 旅行なんて？」

スバルは 命令形の文章には突っ込みます 真意を聞いた

「あなただけ、休学してて 修学旅行に行つてないでしょ？」

6年生最後の思い出がないのは寂しいじゃない

ルナ なりにスバルを気遣つての提案だった

「え、いいの？ 僕だけのために旅行に行つてくれて」

「当たり前でしょう、私達はブラザーなのよ？」

キザマロや、ゴンタ、ツカサに ジャックも頷く

「…ありがとう」

いつも救われているな と感じる スバル

(ほんと… 委員長には敵わないや…)

「で、どこに行くかを今日、スバル君の家で決めましょう」

「うん、わかった！」

キーン コーン カーン コーン

授業の開始を告げるベルが鳴る

スバル達は それぞれの席へと戻つて行つた

(旅行 か…、楽しみだなあ)

スバルは終始笑顔をだつた

-放課後 -

押し寄せる生徒の奔流を掻き分けて

スバル達は家へと向かつた

「さて、旅行はどこに行こうかしらね？」

早速、旅行の行き先を決める事にした

「はい、はい、俺は牛丼が食べれる所を希望するぜ」

「ゴンタ、話を聞いていたのかしら？」

笑顔を裏に壯絶な黒いオーラを噴出しながら、返答を促す

「な…なんでもないぜ」

ゴンタは黙つた

「次！」

「は はいっ、僕はヤエバリゾートに…」

「それは、私達が修学旅行に行つた所でしょ？ 次！」

キザマロ も 震えながら 黙る

ツカサ、ジャックも黙り込む

下手な事を言つてはいけない

5人は暗黙の了解を瞬時に察知する

「まったく、こんなにも案が浮かばないとはね… 星河君 どこがいいかしら？」

矛先がスバルに向く

「え、 ぼ 僕！？」

「そうよ？ あなたのために旅行に行くんだから、あなたが行きた

い場所にじましょ「

まさか の展開

「「へーん…、シャーロとかの夜景を見てみたいかなあ」

シャーロは北国なので空気が澄んでいるので 星 がよく見える

「シャーロね、どうかしら、みんなは？」

「「異論ないぜ（やす）」」

「うそ、シャーロなんて行つた事ないからなあ

「あやこ遙かにせば？」

上から「ンンタ、キザマロ、ツカサ、ジャックは答える

「あら、ジャック、行つた事あるのかしら?」

「ああ、昔、ちょっとな…」

ジャックの顔に陰りが生まれる

「ジャック！ あなたはもう昔のあなたじゃないのよ

そんな過去なんて、あなたが背負つていけばいいだけの事ですわー。」

ルナはジャックを励ます、もとて命令する

ジャックは 目を丸くする

(背負つていけ か・・・)

「…ありがとな 委員長」

小さく咳く、ルナはちやんとの感謝を聞いていた

「さて、旅行地はシャーロに決定したとして、何をしようかしらね
？」

うーん…、みんなは腕を組む

結局、この後は何も浮かばなかった

夕方になり、みんなはそれぞれの家へと帰つていった

「ただいまー」

ミソラが仕事から帰つてきた

「「おかえり」

寒かつたのか、ミソラは頬を紅く染めていた

スバルは自分の両手でミソラの頬を包み込む

「えへへ、スバルは暖かいなあ～」

嬉しそうに 笑う

「あ、そうだ、ミソラ 来月のたゞ連休空いてる?」

「来月の? ちょっと待ってね、ハープ」

『ボロロン、んー… 残念ね、ライブが入ってるわ』

「わっか…」

スバルは残念そう

「どうかしたの?」

「実はね…」

委員長の提案で、シャーロに想い出を作りに旅行に行く事になつた事を伝えた

「ふーん、やうなんだ、でも、お仕事だからしょうがないね!」

それに旅行なんだからせ、6人で想い出を作つてきなよ

ミソラは少し残念そうだが、スバルの為と旅行を後押しした

「うん、楽しんでくるねー その代わりミソラもライブ頑張るんだよー!」

「うん!」

二人は 指きり をした

夕食の際にスバルは、あかねと大吾に旅行の話をした

二人とも賛成してくれた

「いい友達を持つたな」

大吾はスバルの頭を撫でる

「ミソラもライブ頑張るんだぞ？」

「うん！」

本格的な冬の到来を告げる秋風の中、今日も星河家は暖かかった

第1-5話　日常　と　提案（後書き）

今日はまだまだ　投稿　したいと思こままでー

第1-6話 出発（前書き）

旅行編です

第16話 出発

10月の半ば、やっとテストを終えた

明日からは、待ちに待つた旅行だった

移動だけで半日かかるので

2泊3日の旅行は、実質1日しかシャーロを楽しめない計算になる

スバルは荷造りを始める

ミンラはライブがあるので昨日から出かけていた

逸る気持ちを抑えて、眠りついた

朝を迎える

時刻は6時30分

ん~ 伸びを一つしてから

リビングへと行き朝食をとった

集合時間は7時15分

スバルは余裕を持って出かけた

ウェーブライナーの乗り込み場の前で待つこと数分

続々と集まってきた

なんと、遅刻の常習犯であるゴンタの姿もそこにはある

「え、ゴンタ！？」

スバルは驚きのあまり、口に出す

「へつへー、今日の俺は一味違うぜー！」

胸を張るゴンタ、横から委員長の肘打ちを腹にへりつ

「私が朝、起こして上げたんでしょうー！」

「す すまねえ ついな…」

なるほど、ゴンタはルナに起こしてもらっていたのか

最後の一人は、なんとジャックだった

余裕を持ってきたつもりが ルナ に一括

「遅い！ ジャック

「遅い！ ジャック

えー…時間よりも早くきたのに何で俺が…

肩を落とすジャック

「お前が最後だからだ

最後の部分を強調して言つ 「ゴンタ

なんで、「ゴンタなんかに…

ますます氣を落とすジャックを連れて、一同はウェーブライナーへと乗り込んだ

国際空港へと向かい、飛行機に乗り込んだ

余談だが、手荷物検査の際、「ゴンタのポケットから出てきた大量のごみに

検査員の人は、苦笑いせずにはいられなかつた といつ

スバルはそろそろソラが起きる頃だなあ と メールを送つていた

「おはよ ミソラ、これからシャーロに行つて来るね！」

『ミソラもライブ頑張るんだよ？ 約束だよ』

『スバル、お前はホントにソラが好きだな』

ウォーロックは茶化す

「つむきこよ ロック、なんならハープにもメール送つておいてあげようか？」

『つけ 遠慮しつくぜ』

「素直じゃないなあ」

スバルは笑う

6人はシャーロの地へと降りた

「さむ……」

ジャックの言った通りシャーロは寒かった

ゴンタなど、いつもの服装のまま、寒気が肌を刺す

ゴンタはすぐ様着替えた

キザマロは寒いのか何枚も重ね着をしている

観光地を6人で周り、日が傾いてきた

6人は宿へと向かつた

「うわー……」

辺りには高い建物などいくらでもあったが

スバル達が見ている建物は、その中でも群を抜いていた

案内された部屋はファーストクラスだ

明らかに高級そうな物ばかりが置いてある

ソファー一つを取つても、無駄にでかいのだ

「やつぱり、ファーストクラスでなくちゃねー。」

ルナ はご満悦

5人は啞然とする、文字通り、お金の桁が違うのだから

「せ、今日はもう寝ましょう、明日から楽しみましょう!」

6人はそれぞれ、ワンルームの部屋へと向かった

無駄にでかいベット だ

落ち着かないが、移動で疲れていたのか、すぐ眠りについた

第17話 シャーロ

スバルは朝早くから目を覚ましていた
カーテンを開けた

まるで虹の粒のようなものがヒラヒラと舞っていた

極寒の地ならでは現象、ダイヤモンドダスト現象だ

空気中の水蒸気が急激に冷やされたため

小さな氷の粒となり、日光の光を反射するため

ダイヤモンドダストと言われるそうだ

「うわ～・・・」

幻想的な景色に息を呑むスバル

「ミソラにも見せたかったなあ・・・」

やがて、ダイヤモンドダスト現象は見れなくなつた

スバルは部屋から出る

大広間には、もう既にみんなが起きていた

挨拶を済ませ、今日の予定を決める

結果スバル達はシャーロにしかない物を見て周る事にした

歴史的建造物、芸術品、特産品などを見て周った

キザマロ は歴史的建造物にテンショングが上がり

ルナは芸術品を見て周り

ツカサやジャックはシャーロの風土を楽しんだ

ゴンタは常に手に食べ物を持っている

彼は彼なりに楽しんでいるらしい

おっと、スバルを忘れていた

スバルはあかねや大吾、ミソラへのお土産を選んでいた

あかねには、ガラス細工の特産品を、大吾には特産物の食べ物大量に

ミソラへのお土産は考えに考えたあげく

瑪瑙めのうでできた 獅子座と琴座のブレスレットを選んだ

もう、夕暮れ時だった

買い物を終えたスバルはルナ達との合流を果たし、食事をとった

夜になると空は当たり一面 星空 だった

地平線から続く、星空に魅了される

空気が澄んだ、シャーロならではの夜空に、6人は食い入るように眺めた

どこまでも 続く星空

伸ばせば 届くのではないかと、錯覚させられるよしひな、そんな夜空だった

「委員長、それにみんな、旅行に誘ってくれてありがとうございます」

スバルは 5人に感謝した

6年生としての思い出をこの5人で過ごせた事が嬉しくて、しかたなかった

流石に寒くなつてきたので、スバル達はホテルへと戻った

部屋に内設されている、お風呂を交代で入ったスバル達は

修学旅行ならではの、トランプや他愛もない会話を始めた

あつといつ間に、2泊3日の旅行は終わった

最高の思い出を胸に刻んだスバル達は、満足気だった

「それじゃあ、また明日ー。」

「 「 「 「 「つん また明日ー」 「 「 「

スバルはみんなと別れた後、荷物とお土産を抱えて帰路についた
「ただいまー」

あかね、大吾、ミソラはスバルを迎える

スバルはお土産を渡した

あかね にガラス細工の特産品を

大吾 には 大量の 特産物の食べ物を

そして ミソラには 瑪瑙のブレスレットを

ミソラは 魅入っていた

「それね、瑪瑙っていう石でてきててね

ミソラの星座と髪座を掘つてあるやつを選んだんだけど どうかな
?」

「ありがとう、凄い嬉しい… 大切にするねー!」

ミソラはスバルに抱きつく

「わっこ、あ、ミソラはライブはどうだった?」

ミソラはスバルから離れると、指でVサインを作つて見せた

「大成功！」

「よかつた！」

二人は笑顔だつた

スバルは旅の思い出をあかねや大吾、ミソラに話した

お土産や土産話で盛り上がつた

長く話をしていた、スバルは一つ欠伸をする

「スバル、今日はもうお風呂に入つて、休みなさい」

「うん、 そうする」

スバルは風呂に入り、布団へと入つた

旅の思い出が頭の中を巡る、楽しかつたなあ・・

ふと、スバルはミソラを見る

ミソラは手につけた瑪瑙のブレスレットを見ていた

「ミソラ？」

「ん？ どうしたの スバル」

「いや、ずっとブレスレット見てるからさ、どうしたのかなあ つ

て

「あ、うん、凄い嬉しくてさ…ちゃんとハープの事も考えてくれてたし」

「当たり前だよ」

「ありがとう！」

ミソラはそう言って、スバルにキスをした

夜もすっかり深まった頃、まだスバルの部屋には小さな電気が灯っていた

第17話 シャーロ（後書き）

旅行終わりせひやこました！

あんまり長いのもアレだと思ったので

それにしても瑪瑙のブレスレットとはスバルやりりますね！

第18話 胸の内

季節は冬へと移り、ちいぢめらと雪が舞っていた

ミンラは相変わらず、忙しそうだった

クリスマスライブがあるので、そのせいでいつも

一方スバル達は迫りつつある卒業に向けて、在校生へと残すものを考えていた

6年間通った学校だ

それぞれの思いはあるだろう

結果、その感謝の気持ちを言葉として学校に残すこととした

自分達がここに居た事を忘れないように、そして、新しい自分へと進むために

ルナは生徒会長なので、色々と忙しかった

否、ホントに忙しかったのはスバル達だが…

中でも、ゴンタ、キザマロ、ジャックは一瞬使われたらしい

もちろん、スバルとツカサも仕事の手伝いをしていたが

この3人だけは仕事量がちょっと多かったらしく

まあ、理由は簡単なんだが

ジャックがボソッと

「威張るだけの女」 つと

もちろん、この陰口はルナの耳に入り

結果、とばっちりを受けたゴンタ、キザマロも仕事量を増やされた
という話だ

無論、ジャックは2時間の説教が待っていたらしい

涙目だったのは、彼が可愛そだからあえて言いはしない

放課後の教室

スバルは窓から外を見ていた

薄暗い空から、舞い落ちてくる雪を

今年のクリスマスはホワイトクリスマスになりそうだ

「星河君」

物思い耽っていたスバルは現実へと引き戻される

「何? 委員長」

「今年のクリスマスはどこへかかるのかしら?」

ルナにしては珍しく、命令形ではない

「あ、うん、どうよつかな」

スバルはまだ予定を決めていなかつた

ミフリとトートに行きたいなと思いつつも

最近忙しそうなミフリの迷惑にはならないかと考えていたからだ

「どうじょひいて、ミフリちゃんと、どこかに行かないのかしら?」

「僕も、ミフリとトートに行きたいんだがさ、最近忙しそうだか
が……」

「またたく! あなたって人は……」

ルナは頭に手をやつて溜息をつく

「いい? ミソラはちやんは確かに忙しくて疲れてるかもしれない
けど

それ以上に、あなたにトートに誘われる事が嬉しいのよ

「え、どういって?」

鈍い… ルナの顔に一つ青筋がたつ

ビクッ

スバルはルナに睨まれ、怯えた

「まつたく！　いいかしら。//ソラちゃんはあなたとクリスマスを過ごす方が

嬉しいに決まってるって言つてるの！」

どんなに仕事が忙しくて、疲れても

「ソラちゃんことひては、あなたと過ごしていきたいって事！」

ルナにじこまで言わせてやつと氣付くスバル

「そつか、うん、僕　今日ソラに話してみるね、　ありがと　委員長！」

スバルはとびっきりの笑顔をする

ズキン…　胸が痛む

「それじゃ、クリスマスパーティーは、あなたとソラちゃん抜きでやるわ」

そう告げると、ルナはゴンタ、キザマロ、ジャックを引き連れて帰つた

胸の痛みは収まらない

(私、なんであんな事言つたんだらう・・・)

元気がないルナを見て、ゴンタ、キザマロは慌てる

ジャックは 見透かしたかのよう

「苦しいなら、苦しいつて言えればいいじゃねーか

ポロ。ポロ

ルナの目から涙が毀れる

うう… 呻き声とも似つかない 悲哀に満ちた声が毀れた

ゴンタ、キザマロはさうして慌てる

ジャックは無言でハンカチを渡す

「俺達からは何もきかねーよ、もしお前が喋れるよになつたら、
その時に聞くぜ」

素つ気ない態度のようだが、ルナはジャックの思いやりが分かつて
いた

首をかしげるゴンタとキザマロを引っ張りながら、ルナの少し前を
3人は歩き始めた

ルナはジャックから渡されたハンカチで涙を拭きながら

3人の後を少しあなれて歩いた

『スバル、お前は女には頭があがらねえんじゃねーか?』
くつくつくと笑いをかみ殺しながら笑う ウォーロック
スバルはウォーロックの小言を聞き流す

スバルは少し考えた後、帰路についた

第18話 胸の内（後書き）

今回はルナの胸の内を書いてみました

星河君 から あなたと呼ぶようになった件は
ルナの心中を描いてみました

第19話 誘い

その夜、スバルは部屋の椅子の背もたれの部分を前にして座っていた
ミンラは今風呂に入っている

「うーん、どうしようかな」

ルナに言われた通り、ミンラをデートに誘おうと決断したはいいが
行く場所も何も決めていなかつた

『ポロロン、どうしたのかしら？ スバル君』

ハープが 部屋に入ってきた

「あ、ハープ！ ちよつといいや、ミンラにセ

クリスマスの日にデートに行こうって説おつと黙つただけビ、ビ
こにしたらいいかな？」

ハープは 少し考え込む

『それは、 やっぱりスバル君が決めないとね

でも、ミンラはスバル君とデートできるならビリでも良こと黙つわ

最低限のフォローをいれる

「うーん、じゃあ、遊園地とかで思いつき遊ぼうかな？」

『それがいいかもしないわね、ミンラもアイドルとしてじゃなくて

一人の女子として、たまには思いつき遊ぶことが必要なのかもしれないわね』

「やうだね！ ょし、ミンラが上がってきたら話やつかなー！」

「ん、何の話かな？」

タイミングが良ことこのりのか悪いことこのりのか、ヤコヒは、タオルで髪をふくべつらが居た

「あ、うーん、ミンラ クリスマスの日じゃ、デートしない？」

「え、テ テート？ ーー」

ちよつと顔を赤らめる

「うーん、デート。あ、でも仕事があるのかな……？」

「あ、だいじょぶだよー。24日は仕事だけど、25日は休みにしてもうったから」

「それなら、だいじょぶだね。遊園地で思いつき遊ぼうかー！」

「うーん。」

「でもその前に、ミソラのライブを見に行かないとなー。」

「絶対成功させるから、任しといてー。」

「楽しみにしてるよ」

スバルは 笑顔 で ミソラを見上げる

「わー、お風呂に入つてくるね」

スバルは 着替えを持って 風呂へと向かつた

ミソラ は スバルに誘われた デート の事を考えていた

思い返すだけでも 顔が赤くなる

（スバルにデートに誘われた… 嬉しいなあ…）

『ミソラ、よかつたわね』

「うん、凄い嬉しい…」

自分の頬に両手を当てる、ミソラ

その手につけたあつた瑪瑙のブレスレットが目に入る

獅子座と琴座の星座を象つた瑪瑙

スバルがシャーロで買ってきてくれたお土産だ

「私もスバルに何かプレゼントしたいなあ……」

『あら、それはいいわね』

「何がいいかな？」

『そこは、ミソラが考えないとね？』

「だね！」

ミソラはベットに寝転がり、ブレスレットを見ながら考える

やがて、スバルは部屋に戻ってきた

ベットで考え込むミソラを見て、ビックリしたのかな？ とは思ったが

声はかけず宿題をする事にした

部屋にしばしの沈黙が流れる

沈黙を破ったのはスバルだった

「ミソラ 寝よっか」

「あ、うん」

電気を消して 一人は眠りについた

第19話 誘い（後書き）

さて クリスマステートはどう書いたものか…

第20話 似たもの同士

ミソラはライブの打ちあわせの合間を使つては

街に出て色々なお店を巡つた

「スバルに何がいいのかなー」

色々な物を見てきたが、これと書いて決まった物は出てこなかつた

『ミソラ、大事なのは、何に感謝の想いを籠めるかよ?』

「分かってるけど、何にすればいいかが、わからないよお

見かねたハーブは助け舟を出す

『まったく、例えばね、クリスマスとしてはベタなマフラーを送ることにしたとしましょう

そのマフラーを自分で編んで作つたとしたら

それは、ミソラの想いが籠められた物じゃないのかしら?』

ミソラはハーブの提案に目を輝かせる

「そうだね! じゃあ私、スバルにマフラーを編もうかなー!」

『でも、ミソラ あなた縫い物ができたかしら?』

意地悪そうに笑うハープ

う… 痛い所をつかれた

「おお母さんに教えてもらつもん!」

ミソラは膨れつ面を作りながら、毛糸を求めて雑貨店へと入つて行つた

その夜からミソラは、こゝそりあかねに

マフラーの縫い方を習つて編み始めていた

あかねはその様子を見て微笑む

(健気な子ね、まったく、スバルには勿体無いくらいね)

何度も間違えながらも少しづつ形になつていくマフラー

ミソラは日頃の感謝を籠めて編んだ

一方スバルもまた

ミソラへのプレゼントを考えていた

まったく、この一人はビックリ似ていると言つのか何と言つのか…

『はあ…、まだ決まらねえのか!?』

「あー、せつなくて羨うす・・・

首にかかっていたネックレスを手に取る

音符型のネックレス、初デート記念にプレゼントしたやつだ

『スバル、シンプルにいかねえか？ マフラーとかよ、ミンカラ持つてないだろ？』

痺れを切らしたウォーロックは、なんとなく思いついた マフラーをあげてみた

「あー マフラーね！ ロック ナイスだよー」

なんとなくあげたマフラーに食いつく スバル

『おおう？ でも、いいのかスバル？』

「うん！ 大事なのは 気持ち だからだ』

スバルは満面の笑みでウォーロックを見る

ウォーロックは いいのか？ と思っていたが

感謝されたため ま いつか！ 的なノリになっていた

『つへ、ちよつと散歩に行つてへるぜ』

「わかった、行つてらっしゃい

ウオーロックは 展望台と向かった

ハープもやつてくる

『何か用事か?』

『いえ、あなたが一人で展望台にいるから何かしら と思つてね』

ふん ウオーロックは鼻で笑う

『スバルのやつ、わざわざで//ハハハのプレゼントを専えてやがつたんだ』

『あら? スバル君も?』

ハープは田を丸くする

『なんだ ミソラもか? つけ、世話の焼けるやつらだぜ』

『ロックがそんな事言つようになるなんじね』

『ああ! ? 嘘隣売つてんのか?..』

『違うわよ 変わったって言つてるのよー.』

『つけ、もう1年も居るんだ 変わりもするわ』

ハープは 心底驚いた

あのウォーロックの口から出た言葉に

同時に安心感も生まれた

もう復讐に燃えていたウォーロックが居ないことに對して

暫くの間 沈黙が流れた

やがて ウォーロック は口を開く

『さて、帰るか』

ウォーロックはハープと共に帰路についた

第20話 似たもの同士（後書き）

もう一つ 投稿です！

感想よかつたら お願いします！

第21話 ライブ

ここは「ダマスタジオ

今日のゴンタ、キザマロ、ルナのテンションは高かつた
それはそうだろ？、今田はミソラのライブなのだから

3人の上がり続けるテンションに

スバル、ツカサ、ジャックは負けていた

いや、ルナが居る時点で負けは決まってるのだが・・・

が、スバルもまたこの日を楽しみにしていたので

3人に負けずのテンションだった

ツカサは普段通り笑み

ジャックは最初は断つていたらしいがルナの命令なので・・・

ドーン！

ステージ中央から花火と共にミソラが現れる

黒のノースリーブに白いミニスカート、頭には小さなハットを被り、
腕には所々白いリボン

胸に光るネックレスとブレスレットはスバルからの大切なプレゼント

「みんなー 元気ーー！？」

ミソラは、満面の笑みで元気よくそのソプラノボイスを響き渡らせる

元気ーー！！

観客はこれに答える

6人も大きな声で返す

「ジャック！ あんたも大きな声で言いなさい！」

ルナは ジャックの方を向く、その顔は まさに 般若の顔だった

さつきまで あんなに輝かせていた目 ではない

ビクッ

「は はい！」

き 聞こえてるのか・・・

恐ろしきは ルナの耳、地獄耳だけではなく、声を聞きわけることまで、できるとわ・・・

ルナは 般若の顔から ファンの顔へと戻る

「ミソラちゃん」

なんて熱狂的なファンとかしている

5人は ただただ思った 怖い つと

ライブは 中盤に差し掛かっていた

観客のボルテージも最高潮へと達する

「みんなー まだまだ いくよーー！」

ミソラ はノッていた、ファンのために、何より自分の大切な人の約束を守るために

・・・

「それでは 次の曲が最後ですーー！」

観客から エー という 残念そうな声がこぼれる

「えー、まだ聞きたいぜー！」

ゴンタまでもが呟く

「ふふ、次の曲は新曲です！」

私の大切な人に奉げます ”共に歩む道”

アップテンポだったリズムから一転、静かなゆっくとした曲調へ
と変わった

独り泣いていた 弱さも見せずに

独り抱えていた 心に闇を

キミは手を差し伸べた

勇気を出して 歩み寄ってくれた

孤独だった 私を救いに

キミと肩を並べて 歩いて行きたいよ

もう 独りじゃない

キミがいるから

キミと一緒にいく

ミンラは田に涙を軽く溜めながら歌いきった

会場は息を引いて、聞き及んでいた

誰かが 拍手をした

拍車をかけたかのように伝染し、会場内は拍手に包まれた

いつまでも、その拍手は鳴り止まなかつた

ライブも終わり、観客は帰路につく

「それにしても、最後の曲はなんといつか…凄い思いの籠もつた曲でしたね」

キザマロは感嘆し、ゴンタはつなぐく

「そうね、でも、あれば星河君に對してでしょ」

納得するゴンタ、キザマロ

スバルは苦笑いしかできない

「そ、帰ります」

「あ、僕はミソラを待つてるから、ここでね！」

スバルは別れを済ますと関係者入り口の方へと向かった

「ホント、ラブラブだね、あの二人は！」

ツカサが笑う

ジャックも笑う

「だな、けけ」

ルナ は複雑な心境だったが、押し殺した

5人は帰路についた

数十分経つただろうか、関係者入り口に居た熱狂的なファンもさすがに姿を消し

その場には スバル しか居なかつた

手を擦りあつて暖める

「う 寒いなあ 」

スバルは 手に息を吹きかけながら呟く

吐く息は白い

やがて、ミソラが出てきた

「う 寒い・・・」

ミソラは身震いをする

「ミソラー。」

スバルはミソラに駆け寄る

「お疲れ様！」

「え、スバル 待つててくれたの？」

「当たり前だよ」

スバルは 笑いかける

「寒いのに待つてくれてありがとう」

「どういたしまして」

スバルはミソラの手を握つて、歩き始める

暖かい手だった

「ライブ、楽しかった？」

ミソラは 恐る恐る聞く

「楽しかったよ！ 最後の曲は嬉しかったかな／＼」

「えへへ、スバルのために作つたんだもん！」

ミソラはスバルの腕に抱きつく

二人は楽しそうに肩を並べて帰路についた

第21話 ライブ（後書き）

うーん・・・歌詞が・・・

話は変わりますが この小説の
1話1話は長いでしょうか？ 短いでしょうか？
よかつたら 感想等で教えてもらえるとありがたいです！

第22話 クリスマスデート（前書き）

ちよつと長いかもですが、区切りたくなかったので、じっくり承下さい。

第22話 クリスマスデート

「、行つて来まーす！」

晴れ渡つた空の下、二人は家を出た

今田はクリスマス、前々から約束していたデートの日だ

スバルとミソラはウエーブライナーに乗り込む

行き先はベノサイドシティにある新しく作られた遊園地
変装用の帽子と伊達メガネをつけて、腕を組んで遊園地へと踏み出した

「うわー あ、スバルあれ乗ろう！」

ミソラは田舎を輝かせて、ジェットコースターを指差す

「え、いきなり…？」

顔色が青くなる

「早く、早くー！」

ミソラに引っ張られ、ジェットコースターへと向かう

どうやら、このジエットコースターはこの遊園地の田舎っこ

なんでも20分 あるらしい、ますます顔が青くなるスバル

(2... 20分だって! ? うーやめたいな...)

チラシと//ソラを見る

//ソラはもうスイッチが入っているらしく、ノリノリだった
(... 腹をくくわいわ)

スバルは決意した、なんと言つても今日はピートなのだ

楽しもうー。目の前の現実を無視するかのように、スバルは自分に
言い聞かした

順番が周ってきた

//ソラはスバルを引つ張りながら、一番前の席へと座る

(な なんで 一番前なの...)

安全装置が降ろされる、スバルは//ソラの手を握った

始まりを告げるベルの音、静かに動き始めるジエット「スター

やがて、最高到達地点まで達する

ふつと 重力がなくなる

「 キヤああああああああ

「いやだあああああああ

叫び声が木靈する

右に左、時には一回転を繰り返す

楽しい者にしてみれば、あつという間の20分だが

スバルにとっては、とても長い20分だつただろう…

ミソラは上機嫌、スバルはグロッキーになっていた

ベンチへと腰を下す二人

「スバル、だいじょぶ?」

「う うん、なんとかね…」

血の氣の引いた顔で笑顔を作るが、引きつっていた

「い めんね、スバル…」

さすがに氣を悪くしたミソラはスバルに謝る

「だいじょぶだよ、ほらー そつだ、クレープでも食べよつか

スバルは ベンチから立つて体を動かす

「ん、食べる！」

二人は 屋台へと向かつた

「んー、チョコバナナもいいけど、マンゴーもいいなあ」

目移りしてしまう

「じゃあ、僕がマンゴーにするから、ミソラはチョコバナナにしなよ、半分個しょ？」

「うん、そうする」

「すいませーん、チョコバナナとマンゴークレープ、一つずつ下さい」

勘定を済ませ、二人は意外と大きいクレープを頬張る

「ん、美味しい」

「ん、マンゴーも美味しいよ ミソラ」

スバルは マンゴークレープをミソラの前に出す

ミソラがパクつく

「ん~、これも美味しい！」

二人は仲良く、お互のクレープを食べあつた

「美味しかつた～！」

「満悦なミソラ、その頬についたクリームをスバルが指で取つて舐める

さすがに恥ずかしかつたのか顔を赤く染めるミソラ

無意識動作なのかスバルは氣にもとめていない

軽く休憩をいれた後、ミソラはスバルを連れてお化け屋敷へと向かつ

「え…、まさか、ここに入るの…？」

いかにもお化け屋敷だと言える外観、微かに聞こえる、悲鳴…

本日2度目の青い顔

「さ、行くよ スバル！」

「う…うん…」

我慢したのか、抵抗せずにミソラに連れられ中へと進む

薄暗い照明の中、二人は歩いていた。否、ミソラがスバルを連れていた

ガスが吹き出る仕掛けやいきなりお化けが出る仕掛け

スバルはその度にリアクションをとっていた

やつと見えた出口の光、だがそれはマテリアルウェーブによる幻

突如消えた出口、現れるお化け

スバルは走って逃げた、ミソラを置いて

「はあ… はあ…」 怖かつた…

いやいやいや、何か忘れていないか？

「スーパーボールー？」

冷たい声音こわね

ミソラはスバルの後ろに立つ

ビクッ

スバルは恐る恐る振り返る

ミソラは笑っていたが、目が笑っていなかつた

「なんで私を置いていったのかなー？」

「え、あ、その…」 「ごめん ミソラ

スバルは慌てて謝る

「いいよ、別に。スバルが、私を置いて行っちゃただけだから」

言葉に棘を感じる

「ち 違うつてば、置いて行つたわけではなく」

スバルは手をバタつかせる

「ふーん、そなんだ、でも私は置いていかれたよ？」

(ま まざい… ソラがいじける)

「ふん！ もうスバルなんて知らない」

ミソラは ふい っと背を向ける

しかし、そっぽを向いただけで、どこかへ行こうとはしなかつた

背を向けるミソラをスバルは見つめる

構つて と言わんばかりの存在感を見せつける ミソラ

スバルは啞然としたが、やがて穏やかな笑みを作る

そつと後ろから体を覆つように抱きつく

「『めんね、ミソラ もう置いて行かないから

「…ホント？」

「うん、約束する」

「じゃあ、許す」

ミソラはスバルの腕の中で、体勢を変えて正面を向くとスバルに抱きついた

「ち、遊ぼつか！」

「うん！」

二人はメリーゴーランドや「コーヒーカップ等、色々な物に乗つて楽しあんだ

いつしか、日は傾き、夕暮れ時だつた

雪がふわっと舞い落ちる

普段は白い雪が、夕日に照らされ オレンジ色の雪 を降らしていった

「ミソラ、最後にさ、観覧車に乗らない？」

「うん、乗る！」

案内係の人に案内され、観覧車へと乗り込む

一人は向かい合つて座っていた

田は沈み、深々と雪が降る、辺りに静けさが訪れる

スバルはミソラの横に移動する

スバルが軽く揺れる

スバルはハンターからプレゼントを取り出す

「ミソラ、はー！クリスマスプレゼントー！」

スバルは可愛くラッピングされた包みを手渡す

「うわ！ ありがとう、スバル、開けてもいい？」

「うん、いいよ」

ミソラは包みを開ける、中からピンク色のマフラーが出てきた

「可愛いー！」

ミソラは喜んだ

ミソラもまたハンターからプレゼントを取り出す

「はー！ スバル！ クリスマスプレゼントー！」

ミソラもスバルにプレゼントを手渡す

「ありがとう！ 開けてもいいかな？」

「うさー。」

中からは青いマフラーが出てきた

「うわー！ マフラーだ！ ありがとう、ミンラ」「ソラ」

「丁寧に作ったつもりだから、綺麗だと御うなづ…」

「え、これ、ミソラが作ったの？」

「ミンラは「クリ」と頷く

「ありがと、ミンラ… 大事にするね」

手にしたマフラーから云わぬ、ミソラからの真心

ミンラからの贈り物は、今まで生きてきた中で一番嬉しいものだった
やがて観覧車が頂上に差し掛かった頃、一つの影が重なった

数秒後、名残惜しそうに一つの影は離れる

観覧車から降りる時、乗る前とは違つて、二人の首にマフラーが巻
かれていた

今日一日を遊びぬいた二人は帰路についた

「あー。」

「？ デウしたの、スバル？」

いきなり声を出すスバル

「言ひの忘れてた！ ミソラ メリークリスマス！」

「あ！ うん！ メリークリスマス！」

二人は笑いあう

深々と降る雪の中を、首に巻いたピンクのマフラーと青いマフラー
が一人を温めていた

第22話 クリスマスデート（後書き）

クリスマスデート編 終了です！
定番と言えば、定番かもしれないです（笑）
うーん あつけなかつたかな？

第23話 ある日の日常

「ダマ小学校は今は冬休み

スバル達にとりては、最後の冬休みとなるわけだが
だからと書いて何かあることもなく、冬休みは半ばへと差し掛かっていた

「スバル 起きなさい」

「うーー、もうちょっと…」

田は覚めているのだが、布団から出たくなかつた

「うー 寒いなあ

意を決して布団から這い出て、着替えるスバル

「おはよー」

食卓には既に、大吾とミンラが座っている

「うー おはよー」

今日は田曜日なので、大吾も仕事が休みらしい

「うー せやつとまつた休みをもうつたらしく

あかねが朝食を運んでくる

今日はトーストらしい

スバルは大吾の分のコーヒーも注ぐと自分の席に着いた

「はい」

コーヒーを手渡す

「お、ありがとうございます」

大吾 は受け取り 一口啜つた

朝食を済まし、残っていたコーヒー飲み終えると

スバルは部屋へと上がった

宿題をするためだ

ミソラ もついてきたが

スバル が宿題をやっているため、暇だつた

しうがないので本棚の本を一冊手に取る

「宇宙の神秘」ミソラは本の表紙を見ると、そのままその本を棚に戻した

クッションを抱き寄せて横になる

「スバル 暇」

ついにミソラは我慢できず、スバルに話かける

「え、暇って言われてもな.. なんかする?」

スバルは取り組んでいた問題を終わらすと、ペンを挟み込んで閉じた

「おしゃべりしよー」

「ん、いいよ」

スバルは椅子から降りて、ミソラの横に座る

・・・

クリスマステート以来、ミソラは何かと忙しく

年越しすらも家で過ごさせていなかつた

長い間、話していたのだろうか

もう昼になっていた

窓から射す光が、どこかポカポカとした気持ちにさせた

スバルは欠伸をする つられてミソラもある

ふふ 二人は笑う

「欠伸移つた！」

「だね！」

スバルは伸びを一つすると

ミソラの横に寝転がる

「ん」 暖かいねえ」

「だねえ～」

目がトロンとしてくる

やがて、二人は静かに寝息をたてて寝始めた

ウォーロックが気をきかして、タオルケットを一人にかけると

自分もスリープモードへと入った

「スバルー」

あかね がスバルの部屋へと入ってきた

「あら？」

部屋の中央で寝ている二人が目に入る

「ホントにいつも一緒にね」

あかねは柔らかな笑みをつくり、リビングへと戻った

どのくらい寝たのだろうか、窓から見える景色はオレンジ色に染まつていた

スバルは起きようとするが起きれない

ミソラがスバルの手を巻き込んで寝ているのだから

スバルは少し考えたが、何かやうなくちゃいけない事もないのでもうすぐ、卒業だなあ なんて事を考えていると

ミソラが起きるまで横にいる事にした

ミソラが畳を擦りながら起きだした

…寝ぼけているのか、ミソラはスバルの顔を見ると抱き着いて、また寝てしまった

「え、ちょっとミソラー。」

わざよりも動けない状況になっていた

スバルはミソラが落ちないように背中に手を回して支える

ガチャ

「スバル、ミンク、あなた起きたなや。」

あかねはスバルの部屋へと入る

「あひ～ 起きて毎々何してゐのかしぃ？」

あかねは楽しそう

「え、あ、いや、これせミンクが…」

「あひ、ミンクが勝手に抱きついただけで、スバルは嫌なのね？」

いじわるモード全開のあかね

「…嫌ではないです」

スバルは反論するのをやめた

「じゃ、ミンクを起しに来て、下にきなさい、『飯食べるよ』

あかねは本来の用事を済ませ、下へ降りて行つた

「ミンク、ほり起きて」

自分に抱き着いてミンクを揺りしながら起いくす

ん～？ やつとミンクが起き始める、が

なぜスバルが田の前にいる？ いやいや、なんで抱きかかえられてこる？

ミソラは慌てて、スバルから離れる

「なんで私、スバルに抱き着いてたの！？」

顔を赤くする、自分の意識がある時は抱き着いても平気なのに

寝ていた時だとさすがに恥ずかしいのだろう

「ミソラが寝ぼけて抱き着いてきたんでしょう…」

スバルは 体の自由 をやつと得た

「つと、『飯だつてわ』

「あ、うん」

二人は 夕食を食べに降りた

待ちうけていたのは、言つまでもなくあかねと大吾の質問の嵐だった

スバルよりもミソラの方が、顔が赤かったのは言つまでもない

いつもして今日も 一日が過ぎていった

第23話 ある日の日常（後書き）

今回は 特に何もない 日常を書いてみました

～番外～ ドラマ撮影編（前書き）

前に書いていた通り、今回は「ドラマ撮影編」です

「スバル君、起きて！ ほら、仕事遅れちゃうよ？」

ミソラはスバルを揺すって起こそうとするが、スバルはなかなか起きない

『そんなで起きたら、俺も苦労しねーよ』

『あら、じつゆいとかしぃ〜。』

ウォーロックに発言にハープが興味を示す

『つまりだ、俺はずーっと朝、スバルを起こしているが

その程度でスバルが起きた試しがねーってことだ』

『そんなにスバル君は朝が弱いのね…』

ハープはスバルに目線をおくると妙に納得する

「でも、起こさなきや！ スバル君！」

「もう、スバル！ 起きなさい！」

「え？ あー！」

スバルが跳ね起きる

『な！？』

ウォーロックは唖然とする

「やつと起きた！ ほり、早く」飯食べて、仕事に行くよ
ミンラに催促され、着替えてリビングへと向かった

朝食を済まし、展望台へと向かった

ビーナス今回ドライマタウンで行つゝ
二二二二

なんでも、一人の女の子と男の子の出番に をモチーフにしてくる

二二二二

「おはようございますー。」「

元気よく一人は挨拶をする

ミンラは慣れたものだったが、スバルはやや緊張している

読み込んでおいた台本眺め、自分の出番を待つ

と言つても、ほとんど、スバルとミンラは呼ばれっぱなしのだが

ミンラはスバルの知つてゐる普段とは違つて（スバルだけなのだが）

女優だった

(うわー 激しいなあ ミソラちゃん)

カメラの前で、女優を演じるミソラにスバルは感心していた

(よし！ 僕も頑張りつー…)

自分にやつ言い聞かして、初めての撮影に挑んだ

・・・

「はい カット！ いいね！ スバル君！…」

「え、あ、ありがとうございます！」

監督からの賞賛に、驚いたがスバルは頭を下げる

「スバル君、初めてなのに凄いね！」

ミソラまでもスバルを讃めるのだから、スバルは顔が赤くなっていた

「じゃあ、今日の撮影はこれで終わります

明日は朝6時からの撮影なので、よろしくお願ひします

(う 6時・・・)

「はい、わかりました～」

「は　はい…」

(6時は ちょっとキツイかな…)

一人は帰路に着く

道中、スバルは立ち止まる

「ミソラちゃん」

「うん？ 何かな？」

スバルに呼び止められ、ミソラも立ち止まる

「あのや…」

スバルは真剣な表情でミソラを見る

「明日、朝起こしてもらつていいかな！？」

一変、真剣な表情は崩れて、半泣き状態だった

「僕、多分起きれないから… 願い！」

「ふつ あははは」

ミソラは大笑いしている

何事かとスバルはミソラを見つめる

「ははは… あー… 可笑しい 」

「！？ // リリちゃん、僕は真剣なんだよ？」

スバルは むつとした顔だった

「じめんね、でも、真剣な顔だったから、何かと想つたら 朝起こ
して つてや 」

// ン//は笑いすきで出た、涙を拭う

「う//… 酷いや…」

「ちやんと起いすから、安心してよ 」

「ホント？ 」

「うん、なんなら毎日起いしてあげるから

「え 每日…？」

「うそ…」

// リは歩き始めの

(「ーん、毎日かあ…）

結果オーライと並べべきなのだろうか？

スバルはミソラを追いかけて走った

こうして、時には朝早くから夜遅くまで続く撮影に徐々に慣れていった

記念すべき、スバルの初NGは何を隠そつ

ミソラの事を ミソラ つと呼ぶシーンを ミソラちゃん と呼んだ事だった

いくら台本が頭に入つていようが、その台詞を言つのに抵抗があったのか

はたまた素で ちゃん 付けをしてしまったのか

それは、スバルにしか分からなかつた。否、スバル自身も分かっていなかつた

実はこのドラマの役名はそのまま 韶ミソラ と 星河スバル として使われている

演技でスバルは、ミソラの事を ミソラ と呼ぶためか

いつの間にか、スバルは、ミソラにちゃん付けをしなくなつていた

ミソラも然り、スバルに対しても君付けをやめていた

こうして、二人の仲は急速に深まつていった

～番外～ ドラマ撮影編（後書き）

感想等よかつたらお願ひします

第24話 卒業（前書き）

今回はちょっと短いです

第24話 卒業

真新しい学生服に身を包み

スバルはリビングへと降りた

「お、スバル 中々似合っているぞ」

大吾は笑って スバルの頭に手をのせる

「へへ、あ！ ミソラ どうかな？」

スバルはミソラの方を向き、学生服姿を見せる

「似合つてるよー！」

とびっきりの笑顔をスバルにおくる

ミソラは本来ならば、スバルと同じ卒業する立場の人間なのだが

如何せん、仕事があるため通信教育をしている

そのため、卒業式には出れないのである

しかし、ミソラはスバルの晴れ舞台を見るために、仕事の休みを取り

あかねと大吾と共に、見に行くという事になつていた

「ありがと！ じゃ、先に行ってるね！」

スバルはルナ達と共に学校へと向かつた

今日はスバル達の卒業式

また新たに、この学校を巣立つていく生徒を、校長は玄関で出迎えた

「「「「おはよっ!」やこますー。」「」「」「」「

スバル、ルナ、ゴンタ、キザマロ、ツカサ、ジャックは 元気よく
校長に挨拶をする

「ああ、おはよー。」

スバル達は 賑やかな声のする教室へと向かう

小学校生活最後のベルが鳴る

ガラ

先生が教室へと入ってきた

手には 出席簿 と 卒業おめでとう と書かれた花 を持つて

最後の出席の確認を取り終え、全員の顔を一度見る

その顔は とても穏やかだった

スバル達は一人一人 花を 制服へとつける

やがて、時間となり、体育館へと入場する

一人一人卒業証書を受け取り、それを両親へと手渡す

スバルもまた、あかねと大吾そしてミソラの元へ行き、卒業証書を手渡す

あかねは田を赤くしながら、口にハンカチを当てて、ただ一言

「おめでとう」と口にした

大吾 は 息子の成長した姿 に頷く

ミソラもあかね同様目を赤くして いたが、心からスバルを祝福した

「へへつ

スバルは にこやかに笑う

6年の思い出を胸に抱いて（スバルにとっては2年だが）

コダマ小学校を巣立つて行つた

桜咲き、卒業を迎える生徒を祝つかのよつて

風が桜の木を揺らし、花びらを舞い上げた

第25話 花見

今年の桜も綺麗に咲き誇つていた

今日は、星河一家で某所に花見に来ていた

何年もこれなかつた花見をしに、新しい家族であるミソラを加えて

ウォーロックとハープは場所取りに朝からいるはずなのだが、

スバル達は ウォーロックとハープを探す

『大吾ー ここだぞ』

「おー 随分良い所を取つたな！」

一本の桜の大木が咲き誇る場所だつた

大吾がニヤつと笑つて、ウォーロックに親指を立てる

『つへ、こんなもん朝飯前だぜ！』

ウォーロックは調子にのる

『ポロロン、よく言つわね

あんたは寝ていただけじゃないの』

ハープがジト目で真相をばらす

『「うべ……』

さすがのウォーロックも黙る

一時の沈黙…

沈黙を破つたのは ミソラだつた

「それにしても、凄い綺麗だねえ」

ミソラは 桜の大木を見上げる

時折吹く風が、桜の花びらを揺らし舞い落ちてきた

ミソラは手のひらで桜の花びらを掴んだ

「あ、お弁当を食べましょうか！」

あかねは 重箱を取り出し、開く、中からは

三色おにぎりやからあげ、野菜の和え物等バランスのいいおかずが出できた

「「うわあ 美味しそうー！」

スバルとミソラは田を輝かせる

「じゃ、頂こうかー！」

「 「 「ん」 」

「 「 「 「 いただきますー.」 」 」 」

絶品だった

スバルはからあげを頬張り、ミンラもまたおにぎりを頬張っていた

「 「んー 美味しいー」 」

「ふふ、よかつたわ」

あかねは「口つと笑うと、おにぎりを一口食べた

大吾は片手にビールを持ち、桜の風景と今ある家族の風景を見ていた

スバルが喉に物を詰まらせ、胸をドンドン叩いてる

ミンラは慌ててスバルに飲み物を渡す

あかねはあらあらと口に手を当てて微笑む、そんな風景を

大吾は思う　帰つてこれで良かつたな　つと

(おつと、俺らしくないな)

大吾は手にしたビールを一口呷つた

結構な量があつたはずの重箱は空になつていた

ミソラが ペロリと食べた おかげだが

あかねは 重箱をしまつと 足を伸ばして大吾の横に座る

「んー 今日はいい天気ね」

「ああ、そうだな」

青空に所々白い雲が浮かんでいた

「スバル、ちょっと歩かない?」

「ん、いいよ」

スバルとミソラは立ち上がり、桜並木を歩き始めた

風が花びらを飛ばしながら、吹き抜ける

「んー 気持ちいね」

ミソラは伸びをしながら、スバルの手を握る

「ぽかぽかしてて、気持ちいね」

スバルは手を握り返す

少し歩いた頃だろうか

あ、ミソラちゃんだ！

ミソラがファンの子に見つかってしまった

今日は 家族で花見 だったので、変装などしていなかつたかせいか

次々と人が集まつてきていた

「もじろつか、ミソラ」

「うん！」

スバルとミソラはファンに囲まれてしまつ前に逃げる事にした

追いかけてくるファンの子達から逃れ、二人は大吾とあかねの所へと戻つた

「いやー 危なかつたね」

「ふふ、『めんね』」

ミソラはぺろりと舌をだして 笑う

言わすもがな スバルは見惚れていた

・・・

「スバル、ミソラに見惚れてるでしょ？」

「ーーー」

「え、あ、いや…」

あかねに核心をつかれる

慌てるスバルをミソラが見つめる

「はい、見惚れました…」

スバルは 自由する

「えへへ、そうなんだ」

ミソラは満面の笑みでスバルに近寄って 抱きつく

「ありがと、でも私はスバルだけのだよ?」

耳元でそつと呴く

スバルは一気に顔が赤くなる

「ちよ、ミソラ／／」

ミソラはスバルから 離れる

「えへへ」

ほんのり頬を赤くしながら 笑う

あかね と 大吾は微笑ましく見ている

どんどん顔が熱くなつていくのを感じるスバル

恥ずかしさに耐えかねて か

「と トイレに行つて来るね」

スバルは立ち上がり、トイレへと早足で向かつた

「ふふ、スバルもまだまだね」

「ああ、所でミソラ、さつきは何を言つたんだ?」

「内緒!」

口に指を当てて 笑う

「はつはつは、内緒か、ミソラ スバルをよろしく頼むな」

「うん!」

話は当の本人を際し置いて進んでいた

程無くして、スバルが戻つてきた

ニヤつくあかねと大吾を見て瞬時に悟る

何かあつたな つと

ミソラは先ほどよりもさらに上機嫌

「何かあつたの？」

「なんもないよ」

絶対何かあつたなと思つたが、まあいいかと気にするのをやめた

家族4人で 桜を見ながら、たくさんのこと話をした

やがて日も傾き、夕暮れ時となる

夕日に照らされる桜もまた美しかった

「来年もまた」よつねー

ミンラが言った

「うん！ そうだね」

来年も花見に来る約束をして、スバル達は 帰路に着いた

来年もそのまた来年も、スバルと一緒に来れるようだと

桜 桜よ

誰が為に 咲き誇る

誰の為でもない

ただ 想いを花にし 咲き誇る

第25話 花見（後書き）

今日は 花見 にしてみました
なんか 文章がおかしいような気もしますが・・
よかつたら 感想お願いします

それと来週テストがあるため 投稿が遅れます！

「「行つてきまーす」「

元氣よく挨拶をして、家を出て行く

あかねと大吾は、一人を見送つた

今日から、スバルとミンラは中学生

ミンラもスバルと同じ学校に通つことになつていた

なんで同じ中学校かと詰つと

理由は簡単だ 「スバルと一緒に居たいから」 だそ�だ

ミンラは、小学校へと通わず、通信教育で勉強をし

アイドルとしての仕事をこなしてきていたが

中学へは、キッチンと通う事にしたらじい

勿論、仕事はやめずに、学業との両立を図るつもりじい

そうそう、スバルも、どうやらミンラと一緒に仕事をするつもりじい

ま、仕事と言つても、バラエティー番組やらこ

ミンラとセットで呼ばれたりするだけなのだが

二人は、制服を着ているせいが、はたまた、中学生になつた とい
う期待からか

とても、新鮮な気持ちだった

スバル達が通う事になるコダマ中学校は、コダマ小学校から
たいして離れていない為、そこまで、新鮮味はないのだが…

1クラス24人で、組みは1～5組まであるらしい

玄関に掲示されている、クラス表には

1組に ルナとジャック

3組に ゴンタとキザマロ

5組に スバル ツカサ ミソラ という風になつていた

「あ！ スバルと一緒にだ！」

「だね！ ツカサ君もいるよ」

「やつぱり、ジャックは、ルナちゃんと一緒にだつたんだ

ミソラは笑っている

「え？ どう」と？

「ふふ 内緒だよ！」

スバルには、何の事かわからない

やつぱり、鈍いなー なんて思つてゐるミンラだった

5組には、スバルの知らない生徒がたくさん居た

いや、スバルの事を知つてゐる生徒は、たくさんいるのだが

既に、ミンラは、ファンの子達に囲まれている

愛想良くサインなんかを書いたり、握手したりしてゐ

「スバル君」

「ん、ツカサ君！」

「また、同じくクラスだね！」

「うん、よひしけ！」

スバルはツカサと握手する

その頃の一組では…

(とほほ… また委員長と同じクラスだ)

ジャックが泣いていた

「ジャック！ また、あなたと同じクラスね」

「そーみてーだな…」

「何かしら？ ビーか不満があるのかしら？」

一瞬出た黒いオーラを感じ取つてか

「そんなわけねーよ、 そんなわけ…」

「ふん！ それにしても、星河君と同じくわやんが同じクラスだなんて…」

やつぱり、ルナは機嫌が悪かつた

- 3組 -

「やつぱり、一緒にしたね」

「みたいだな」

背の順で並ばされたら、間違えなく一番前であるいつ郎のキザマロと

縦においても横においても、たぶん一番だと思われる「コンタの一人は

委員長の居ないクラスに安心感を感じつつも、寂しかった

「委員長がいないと、教室ってこんなに静かなんだな」

コンタが静かな教室を見て、呟く

「ですね、やっぱり、委員長は凄いです」

「だなー。」

改めて、ルナの凄さを知つた二人だった

第26話 中学校（後書き）

ご指摘を頂けたので改善してみました
少しずつ、他の話も直していきたいと思います

感想・評価 改善点 等 よかつたらお願ひします

第27話 担任は…（前書き）

いつも、お久しぶりです
やっとテストも終わりました！
勉強中、色々と話もネタもできたので、これから投稿頑張ります
応援よろしくお願いします！

第27話 担任は…

ガラ

見覚えのある黒い髪の女性の先生が入ってきた

「おはようございます」

体は細く、髪は腰程もある長い黒髪で大人っぽさのある人だった

「ク、クインティア先生！？」

スバルは驚く

「ふふ、久しぶりね。改めて自己紹介をするわ

これから1年間、あなた達の担任を勤める事になった、クインティアです

どうぞ、よろしくね

それから、スバル達はそれぞれ黒板に名前を書き

自己紹介を済ませた

余談だが、スバルとミソラの自己紹介の時だけ、やたらと質問が多く

クインティアが止めに入る程だったといつ

今日は入学式だけなので、学校 자체は早く終わった

「ジャック！ どうしてクインティア先生が担任だって事教えてくれなかつたの！」

帰り道、スバルはジャックに聞いた

「ねえちゃんが言つなつて言つてたんだよ」

「え、なんでまた」

「はあ…… 暁の悪い癖が移つたんじやないか」

ジャックは憂鬱な顔になつた

「「ひー」とは、クインティア先生、暁さんと一緒に暮らしているの？」

ミンリが嬉しそうに聞いてくる

「ああ、一緒に暮らしてると、俺はなんか肩身が狭いけどな」

最後の一言はなにか切実な意味が籠められていた

「そうなんだ～、いいな～」

「いこなつてミンリちゃんは、もうスバル君と一緒に暮らしてゐるじ
やん

ツカサはつづく

「さうだけど、一人暮しつついいなって」

ミソラはスバルの腕に抱きつく

スバルは苦笑いだった

「一人暮しじゃなくて、俺もいるんだけどな……」

ジャックは寂しそうに呟いた

なんとも言い難い空気が流れた……

「それじゃ、みんな、また明日！」

道の十字路で、みんなと別れた

「それにしても、クインティア先生が担任だなんて、びっくりした
ね」

「うん、びっくりした！ それに暁さんと一緒に暮らしてるなんて
ね！」

「いや、あの二人は大人だからね」

そういう話している内に家へと着いた

二人はあかねに、ミソラと同じクラスだった事

担任がクインティア先生だつた事を話した

「あら、一人とも同じクラスで良かつたわね」

あかねは微笑む

「うん！」

ミソラは嬉しくなつてスバルに抱きつく

「ミソラ、家とかなりいいけど

学校ではあんまり抱きつかないでね」

「えー どうしてー？」

ミソラはスバルから離れて、田を見る

「周りの人に何か言われるの嫌だからだよ

「いいじゃん、今更！」

「よくない！ 学校では抱きつかない事！ いい？分かった？」

ミソラはスバルにビシツと言われる

うー 頬を膨らまして膨れつ面を作るミソラ

膨れつ面を作るミソラは可愛らしかった

ファンの子が見れば、それだけでテンションが上がりまくってしまう事だらう

しかし、スバルは強かつた

「そんな顔してもダメ！」

「ケチー」

「ケチじゃないでしょー。まったく、もう…」

こんなやり取りが30分くらい続き、洪々ミソラが了解したのであつた

第27話 指任は…（後書き）

クインティア出しちゃいました！
もしかしたら、クインティアと暁の番外編作るかもです

第28話 嫌な予感

キーンゴーンカーンゴーン

授業の終わりを告げる子鈴が鳴る

うへん

ミソラは伸びをした

ミソラが伸びをしている姿を見て、複数の男子が歓喜の声をあげる

「スバル、お弁当食べよ」

笑顔で隣に座っているスバルを見てお弁当を取り出す

「ん、食べよっか」

スバルとミソラは机をくつづけて、お弁当を広げる

お弁当はあかねの手作りだ

楽しそうに会話をしながら食べる風景は、女子にとっては冷かしの対象であり

男子にとつては、嫉妬の対象となるだろう

それほどまでに、この一人はお似合いなのである

「スバル君、僕も混ぜてもらつていいかな？」

ツカサが手にパンをもつて一人の所へやつてきた

「うん、いいよ」

ツカサを混せて、三人で昼食を食べた後、他愛もない会話をした
昼休みが半ほどまで終わつた頃、ミソラやスバルを日当とした生
徒が

5組には押し寄せてくる

ミソラは慣れた手つきでサインを書く

スバルも大分慣れたが、ぎこちなさがあつた

勿論、ツカサは一人を見比べて、クスクスと笑つていた

「ミソラちゃん、今日ちょっと話があるんだけど放課後いいかな？」

銀髪で身長^{しゃくじよう}が高く、そして顔立ちの整つた男子が周りに聞こえない
よつに囁いた

「え」

「じゃ、放課後中庭で待つてるね」

銀髪の男子はそう告げると立ち去った

(行かないと行けないのかな…)

ミソラはスバルをちらりと見たが、スバルは握手を迫られていた

ミソラは心に露もやが、掛かったかのような気分だった

その後の授業も、ミソラは身が入っていなかつた

-放課後-

「さ、帰ろっか」

スバルは鞄に勉強道具を詰めて、ミソラに促す

「あ、ごめん… ちょっと用事があるから、先帰つてもいいよ?」

ミソラは笑顔を作るが、自分で笑顔になつてゐるか不安だつた

「ん、じゃ先に帰つてるよ?」

「うん、私も用事済ましたら、すぐ帰るから」

ミソラはやつと告げると鞄を持って教室を出た

「なんか、ミソラ変だな」

スバルは、首を傾げる

「さつきの笑顔をも、無理やり作つた笑顔みたいだつたし…」

『知りたいか？スバル』

ウォーロックがウィザードオンしてきた

「知りたいかつて、ロックは何か知つてるの？」

『実はだな…』

ウォーロックは昼休みにあつた、銀髪の男子とのやり取りを話した

「え…、そんな事あつたの？」

『おう、あつたぞ、さつきハープとも話したが、お前も行つた方がいいんじやねーか？』

「…、ロック！ 中庭だつたよね？」

『ああ』

スバルは鞄を放置して走りだした

第28話 嫌な予感（後書き）

さあ、銀髪の男子は何の為にミソラを呼び出したのでしょうか！？
今後の展開に期待あれ！

第29話 ヒーロー

「ダマ中学校の中庭は、本物の木が植えられており

ベンチがあちこちに設置されていた

ミンラは言われた通りに、放課後、中庭へとやつてきた

スバルに対し、何か悪い気持ちを抱えながら

「やあ、来てくれたんだ」

後ろから声がする

ミンラは振り向く、銀髪の少し長めの髪型で、身長は高く

顔立ちの整った男子が立っていた

「何の用事ですか？」

ミンラは用件をさつと済ませたかった

「まあまあ、そんなに慌てないで…、まずは自己紹介をさせてよ

僕は 神崎 キョウ 、学年はミンラちゃんと同じ一年生だよ

爽やかな笑顔をおくる、大概の女子なら、この笑顔でイチコロもの
だろう

「…で、神崎君は何の用事で私を呼んだのかな？」

ミソラには、効いていなかつたが…

「じゃあ、担当直入に言つね”僕と付き合つてよ”」

「無理」

ミソラは即答する

「私には、大切な人が居るし、それに今一番幸せだから」

「大切な人つて星河 スバル か」

「やうよー」

爽やかな笑顔から、一変、苛立ちを籠めた顔つきになつた

「君には相応しくない！　君に相応しいのは僕だ！」

声を荒げてキヨウはミソラに歩み寄り、腕を掴む

「つづ！　痛いから離して」

ミソラは手を離そうとするが、逆に力を籠めてしまつた

「嫌！　離して！」

ミソラは涙目になつていた

(スバル!!)

心中で愛しい人の名を叫ぶ

刹那

「ミソラから手を離せ!」

怒りに満ちた声を荒げて、スバルはキョウからミソラを引き離す
キョウとの間に2~3m程の距離ができた

「スバル!

ミソラはスバルに抱きつく

「だいじょぶっ!!」

「怖かったよ!」

スバルはミソラの頭を撫でる

「「めんね、僕がもつと早く来れば…」

ミソラは頭を左右に振って

「ちゃんと、助けてくれたよ」

作り笑いなんかじゃない、とびっきりの笑顔をスバルおこった

「星河 スバル」

キョウウは咳く

スバルもまた、ミソラの方からキョウウの方へと向き直る

「もうへ、ミソラに近づくな」

怒りに満ちた、低い声で淡々と告げる

見ものが見れば、足が竦みそうだった

「つー、じいは一田出なおすよ、でも僕はミソラちゃんをあきらめ
ないからな」

キョウウはそう言い放つと立ち去った

「ふー、もうだいじょぶだよ」

いつも通りの声音でスバルはミソラの方を向く

「スバル、なんでここが分かったの?」

「ん、ロックが教えてくれたんだ、それに…」

ヒーローはペンチには必ず駆けつけるでしょう?

スバルは少し赤くなつた頬を指で搔いた

ミソラは妙に納得していた

あの時、心の中でスバルの名を叫んだ

叫んだ瞬間、スバルは現れてミソラを助けてくれたのだ

スバルは恥ずかしがつてゐるが、まさにヒーローだった

「ありがとう」

「どういたしまして」

スバルもまた笑顔を返した

『つけ、何がヒーローだつつの

お前をつき、慌てすぎて階段でこけただるーが』

ウォーロックが笑いながら出でてきた

『ロック！――！』

『うげ』

『あんたは、どうしてこんなにもKYOUなのよーこの馬鹿！』

ハープが出てきて、ウォーロックにパンチを食らわす

「スバル、こけたの？」

「ははは…、面白い…」

「そんなに、急いでくれたんだ」

「そりゃそりゃ！」

「えへへ」

ミソラはスバルに抱きついた

「さて、帰るつか

「うん！」

スバルの鞄を取りに一度教室へと戻り、一人は手を繋いで帰路についた

第29話 ヒーロー（後書き）

オリキヤラ登場です

性格は自己中心的なタイプの人間です

ちなみに、ミソラが腕を掴まれていた時にハープが出てこなかつた
訳は

ウォーロックと話をしていたためと周波数が近づいているのが分か
つてたからです

補足説明無しでもいけるように、精進します

第30話 家にて…

「お母さん、聞いて、聞いて！」

ミソラは家に着くなり、あかねの元へ急ぎ足で向かった
「何があったの？」

あかねはミソラの笑顔とスバルの顔が赤くなっているのを見て
ははーん つと何かを確信した

「あのね…」

ミソラは説明した

いきなり告白を迫られて危ない状況になつた事、スバルが現れて助
けてくれた事

「あらあら、そんな事があつたの…、それでミソラはだいじょぶな
の？」

あかねは事情を聞き、スバルもなかなかやるなつと思いつつも、ミ
ソラを心配した

「うん、だいじょぶだよ！」

ミソラは笑顔で答える、人を明るくさせる笑顔だ

「そ、今度からは必ず、スバルと行動しなさいね？分かった？」

あかねは、だいじょぶだろうとは思ったが念をおす

「分かつた、スバルとずっと一緒に居る事にする！」

「スバルもミソラを一人にしちゃダメよ？分かつた？」

「うん、ミソラの傍にずっと居るよ」

スバルは今まで、極力学校ではミソラと居る事を控えていたが今回の事で反省した

スバルの言葉を聞いて、ミソラはむりに上機嫌になつた

「えへへ」

スバルの腕に抱き着いて、顔を埋める

「ずっとと、一緒に居てね！」

「うん、居れる時はずっとと一緒にいるよ」

（それにして、あいつは…）

スバルはミソラに迫つた男子の事を考えていた

自分の中にあんなに対して怒る自分がいる

いや、ミソラの為にか

今、隣にいる大切な人を必ず守ろうと硬く誓った

「スバル？」

考え事をしているのか、真剣な顔つきのスバルを見て

ミソラは声をかける

「ん、なに？」

ニコッとした笑顔でミソラを見る

「いや、なんでもない」

「？ 変なの」

スバルは笑った

やがて大吾が帰ってきて、みんなで夕食を食べた

先程の話しを大吾にもしつたら、大吾もまたミソラを心配した

ミソラは スバルが居るからだいじょうぶ っと言って笑った

そうか つと大吾は納得したがスバルに しつかりミソラを守れ
つとただ一言を告げた

それ以上を大吾は何も言わなかつた

第31話 小テスト（前書き）

もう一つ投稿です

第31話 小テスト

あの一騒動から一週間が経つた

あれからスバルは常にミソラの傍に居た

周りから冷やかしを受けた事もあった、男子から嫉妬の視線も受けた

が、物ともせずスバルはミソラの傍で笑っていた

勿論、仲の良いツカサやルナ、ゴンタ、キザマロ、ジャックは理解してくれている

スバルはそれだけで良かつた

「はい、それでは小テストを始めるわ」

数学教師であるクインティアが小テストのプリントを配り始める

えー…マジかよ クラス中から溜息が漏れる

- 15分後 -

「スバルできた?」

ミソラは隣の席にいるスバルに聞く

「あ、うん 多分出来たと思うけど」

「私、一問分かんなかつたな～」

スバルとミソラは以外と頭が良い

スバルが毎日コツコツ勉強しているおかげか

それに付き合つてミソラも勉強をするよくなつたからである

中学生になつて初めての前期中間考査まであと2週間

スバルは結構楽しみにしていた

「小テストはSHRの時間に返すわ、それでは教科書22Pを開けて…」

クインティアは授業を進める

クインティア先生の授業はとても分かりやすく、人気のある先生なのである

数学を楽しいと思える生徒が結構いるのは、多分先生のおかげだろう

-SHR-

「数学の小テストを返却します、順番に取りに来て下さい」

スバルは小テストを受け取る、点数は… 100点だった

「スバル、何点…？」

スバルは100点の小テストをリソウに見せる

「うわ、満点じゃん！ 私95点だつたよ」

リソウは自分の小テストを見せる

答案部分には赤ペンで解答方が細かく書かれていた

クインティアは定期的に小テストを行っては

間違った部分を細かく説明して返却してくれ為

結果、同じースを繰り返さないようになる

これも人気の一ツだわ

「ディーラーに居た頃と違つて生き生きしてるな」とスバルは思つた

「中間考査まであと2週間です、計画的に勉強する事。それではまた明日」

《さよなら》

「みんな、ちゃんと勉強してるかしら？」

「うそ、してるよー ね？」「」

スバルはリソウにも同意を求める

「うんー」

「当たり前ですよ、委員長！」

メガネをくいっと上げてキザマロが言う

「僕もだいじょぶだよ」

ツカサは笑う

「俺は勉強しないと怖い…」

ジャックは怯える

怖い…？ クインティア先生が？まさかね

ジャック以外の6人は思った

「…で、ゴンタは？」

ギクッ

肩を震わせる

「まさか、勉強していないわけ？」

「いや、してるぜ？」

汗をかきながら、ゴンタは答える

目が泳いでいる

「はあ、まだ2週間前だからだいじょぶだらうナビ…」

ルナは溜息をする

「キザマロ、今日は私とあなたで父互にゴンタに教えましょ

「分かりました！ それでは早速、ゴンタ君勉強しますよ

「え、今日からかよ」

「今日からですー。」

「ちえつ 分かったよ」

ゴンタはキザマロに連れられて帰つて行つた

「それじゃ、みんなまた明日ね」

別れを済まし、二人は家へと帰つた

ミンラは数学の間違つた部分をやり直し

スバルは他の教科を勉強した

第31話 小テスト（後書き）

感想等良かつたらお願ひします！

第32話 新たな予感（前書き）

2　3話程、ルナとジャック視点の話です

第32話 新たな予感

前期中間考査が1週間後に迫った、ある日の帰り道いつものメンバーで帰っていたが、ジャックだけがどうにも元気がなかつた

スバルとミソラは手を繋いで歩いている

キザマロと「ンタは見慣れた事なのだが

羨ましいな…と嫉妬心を抱いていた

ツカサは片やラブラブの二人と片やその二人に嫉妬する一人を見て笑っていた

ルナだけがジャックの異変に気付く

「ジャック、あなたはさつきからびつしたと言つの?」

「いや、別に…」

ジャックは素つ氣無く返す

「嘘おつしゃい、ほら、話なさい」

普段通りの命令口調でルナはジャックに喋らせようとする

「…実はな、毎日毎日ねえちゃんが勉強を無理強いするから

疲れて家に帰るのが嫌なんだよ

それに、今ねえちゃんのやつ、晩と喧嘩してから尚更な……」

ジャックは溜息を漏らす

まつたぐ、喧嘩するのはここのナビ、ビバーチつて俺まで大変な田に……

「あら、そんな事?」

「そんな事って俺には一大事なんだよ……」

ルナの発言に食つて掛かうつとするが、そんな元気もなかつた

はあ……また溜息が漏れる

「ジャック、それなら私の家にいらっしゃい、部屋なら余つてるわよ?」

「へ? 嫌、それは色々とまずいだらう……」

ジャックは一瞬考えたが、ルナの家の迷惑になる事

ましてや男が女の子の家に泊まるのはまずいだらうと考えたからだ

「何がまずいのかしりつ?」

「いや、向つてそりゃ、お年頃の男子が女子の家に泊まつて行くの
はな……」

ルナは黙つて、スバルとミソラを指差す

成る程、確かにあの二人は同じ部屋で同じベットで寝ているが

それは一人が恋人だから的话だろ？

「さ、いらっしゃい。ジャック」

ルナはスバル達に別れを済ますとジャックを連れて家へと帰った

ルナの家は高層マンションだ

そしてなにより高級だ

ルナはジャックを連れて家へと入った

なんだこの広さは？

ジャックはその広さに呆氣をとられる

「ほら、早く入って！ 玄関で立ち止まらないで」

ルナに言われて初めて気付く、ここは玄関なのだと

金持ちつてすげーな と改めて思った

「あ、お父様とお母様が帰つてきているわ

ルナは玄関にある靴を見ると、田を輝かせる

リビングの戸を開ける

「「お帰り、ルナ」」

「ただいま、お父様、お母様」

制服に身を包んだ、ルナの両親 白金 ナルオとユリ子がいた

「む、その子は友達かな?」

ナルオはジャックを見るところに尋ねる

「ええ、ちょっと事情があつてジャックを家に住ませたいのですが
…」

「部屋なら余つてるから、別に構わないよ

ジャック君だつたね?自分の家だと想つて生活して構わないよ

「口うと笑う

「は、はい」

思わず敬語になってしまった

ルナは鞄を置いてくると言つて部屋へと向かつた

「ジャック君、君はルナにとって大切な友達なのだろう。

私達は仕事が忙しくて、ルナと一緒にいる時間がとても短い良かつたら、これからもルナの友達として、あの子を支えてもらいつてもいいだろうか？」

ナルオとコリ子はルナの事を案じ、ジャックに胸の内を明ける
「委員長、いや……、ルナにはいつも俺の方が支えてもらつてます
こんな俺なんかでいいんだつたら、俺はルナを支えて行きたいと思
います」

ジャックは答える

「ありがとう、ジャック君。おっとそれそろ仕事か」

ナルオは時間を確認するとルナに別れの挨拶を済ませ、コリ子と一緒に出て行つた

「さつき、お父様達と何を話してたのかしら？」

「なんでもねーよ、それより……あんがとな」

「何かしら？」

「何つて、泊まらしてくれてだよ」

ジャックは頬を指で搔く

「そんなお安い御用よ、ち、勉強しましょ。」

ルナはそう言ってジャックを連れて自分の部屋へと向かった

ジャックは知った

ルナが実は独りだと呟つ事を、無理をしていた事を

ジャックは思う

支えてあげたいな。と

第32話 新たな予感（後書き）

新たな恋の予感！？

話は変わりますが、オリジナル小説を始めました
よかつたらそちらにも、足を運んでもらえると嬉しいです！

第33話 テスト終了

「みんなテストはどうだったかしら？」

ルナは帰り道に話を持ち出す

「結構いけたよ」

スバルは満面の笑み

「私はそれなりに」

ミソラはスバル程ではないが良いらしい

「僕もそれなりにかな?」

ツカサはニコッと笑う

「俺は余裕だ」

ジャックは余裕だったらしい

「僕はバツチリです」

メガネをキラリと光らせるキザマロ

「…」

「ゴンタは?」

ビクッ

「まあまあだぜ」

慌てて取り繕つ

「ホント?」

「ほ、ホントだぜ?」

まつたぐゴンタときたら… 嘘をつべとすぐ田が泳ぐ

「じゃあ返却が楽しみね?」

「うぐ…」

苦しい咳き声漏れる

「ゴンタ君、素直に白状したら?」

ミンラが助け舟を出す

「委員長!俺…、勉強したのに出来なかつたんだ」

ゴンタが肩を落とす

「出来なかつたつてまさか…赤点!…?」

ルナは予想はしていたがゴンタの白状に聊^{こやせ}か焦る

「いや、どうしても数学の一問が解けなかつたんだ…

100点取れなかつた…」

6人はポカーンと口を開ける

「え？ええ？ てことはゴンター100点目指してたの？」

スバルが我に返り、質問する

「そうだぜ？でも1問だけ解けなかつたんだ」

「じゃあ、それ以外は解けたの？」

「おひ、解けたぜ！」

ええーー。 6人は驚く、まさか、そんな事はありえないはずだ

あのゴンタが数学のテストを1問以外、全部解けただなんて

まさか…ね。

ゴンタの氣のせいだらうという事にスバル達は納得する事にした

「おつとせうだ、ルナ」

ジャックはルナを呼び止める

ルナの家に住んで以来、ジャックはルナの事を委員長ではなくルナ

と呼ぶようになった

「なにかしら、ジャック」

「俺、今日から自分の家に戻るぜ。やつとねえけんと暁が仲直り
しらじいからな」

ジャックは笑う

「そう……、わかったわ」

ルナは一瞬、暗い顔をしたがすぐさま元気な顔を見せる

「一週間ありがとな、おじわるとおばさんにも会えておこしてくれ」

「わかったわ」

それじゃ」と言つてジャックは帰つて行つた

ルナは久しぶりに家へと一人で帰つた

どこか寂しさを感じながら

たつた一週間だったが、ジャックと過ごすのは楽しかった

勉強も捲つたし、なにより一人じやく常に隣に人の暖かみを感じて
いたからだ

はあ：ルナは溜息をする

自分の家がとても広く感じた

いや、もともと広いんだが…

心にぽつかり穴が開いたようだった

第33話 テスト終了（後書き）

さあどうなる？

感想、評価等良かったらお願ひしますー

第3・4話 僕は…（前書き）

長いですが、区切りたくなかったので！

第34話 僕は…

ルナ達はいつも通り、スバルの家に迎えにきていた

「「おはよー」

スバルとミソラが出てくる

「「「「おはよう」」」

中学生になつても変わらない朝の光景

始まりは登校拒否しているスバルを、学校にこなせるためにきていたのが

いつしか、寝坊をするスバルのための迎えとなり

今となれば、すっかり自分で起きれるようになつていたが、習慣となつていた

「それじゃね」

スバルとミソラ、ツカサは5組へ、キザマロとゴンタは3組に

ルナとジャックは1組へとそれぞれ向かった

今日はテストの返却日

楽しみにな子もいれば、逆に最悪な子もいるだらう

- 1組 -

「起立、きょうつけ、礼」

ルナが号令をかける

おっと、言い忘れていた事があった

勿論、ルナは中学生になつた今でも1組の委員長だ

「それでは、数学のテストを返却する

名前を呼ばれたら、取りにきてくれ」

出席番号順に呼ばれていく

テストをもらつた瞬間に喜ぶ者、顔が青くなる者もいた

ジャックはニヤッと笑つている

どうやら、予想通りらしい

ルナもテストを受け取る

ケアレスミスをしただけのほぼ100点に近い点数だ

97点

ルナはドリル状の髪を手で揺らす

「最高得点は97点だ、間違った所は復習する事、それじゃ今日はいいまで」

先生は空になつた封筒を手にして出てこつた

「ジャックどうだったかしりっ。」

ルナはジャックに尋ねる

「おひ、見ひ。」

ジャックは得意げにテストを見せつける

95点

「私の勝ちね！」

ルナは自分のテストを見せる

ジャックは得意教科で負けたのでショックだった

「ほ、他のテストも勝負だろー。」

負けずとジャックは他の4教科での勝負をもちかける

「いいわよ、その代わり、負けたら相手の言ひ事を何でも聞くべのよ

？」

「よし、いいだうつー。」

ジャックはルナと約束を交わした

・その頃の3組・

手にテストを持って

キザマロがゴンタの元へと向かう

「ゴンタ君、どうだったんですかー。」

「キザマロ…、俺…」

ゴンタは肩を落として、テストを見せる

0点

まさか…

キザマロは見間違ったのだうつと一回視線をはずしてから

再度もう一度見て見る

うーん…、これさ、0点だ

「え、い、」「ゴンタ君」

さすがにキザマロせ、ゴンタに確認を取る

「はあ……、名前書き忘れて、〇点だ……」

確かに答案には ナナシのゴンベ と書かれていた

名前をえ書いていれば、そのテストは〇点だつたらしい

キザマロは「コンタの脛に手をポンとおこた

言葉では語りない

- 5組 -

「スバルー、どうだつた！？」

ミンラは隣にいるスバルに聞く

上機嫌な所を見ると、ミンラもなかなかの出来らしい

「ん、9点だつたよ」

テストを見せる

「わあ！凄いね！」

「あつがと、ミンラは？」

スバルはミソラにも尋ねる

「はい！」

テストを見せる

82点

「ミソラも高いじゃん！」

スバルは自分の事のように喜ぶ

「えへへ、スバルのおかげだよ！」「

ミソラはスバルに抱きつく

スバルは椅子に座つていたため

抱きつかれた、いきよに負けて椅子ごと倒れる

「わわ！」

ガタンッ！

スバルはミソラを庇つて倒れたため

ミソラには怪我はなかつたが、頭を打ちつけてしまった

が、いま置かれている状況に気付く

よりによつてクラスで、ミソラがスバルの上に覆い被さつてゐるのだ

男子からの嫉妬の目線、聞こえてくるヒンヒン声

カシャツ

カメラのシャッター音まで聞こえる

「み、ミソラー！」

スバルは慌てて、上に乗つてゐるミソラを起こす

「あはは…、『めんね、スバル』

ミソラは制服の裾を払つて謝る

「いや、別いいけど、それより…」

スバルはこのクラスの雰囲気をどうにかしたいと思つた

写真まで取られたし…はあ。

スバルの胸中を察してミソラはスバルを連れて教室を出た

後に残されたクラスメイトは、スバルに対して

あいつだけ、いい思いしてゐ 等、思い思いに口にしてゐた

「うぬせじよ！ 嫉妬するのもい加減にしたら…」

低くそれでもよく透き通った声でツカサは男子に向かって言つ

さつきまで陰口を言つていた男子はツカサと目を合わせると

視線をはずし、やがて何も言わなくなつた

「人は人、自分は自分でしょ？君達にスバル君に対する文句を言う権利はないよね？」

女子まで黙り込んでツカサを見ていた

「あの二人は付き合つてるんだよ？そつとして置いてよ」

ツカサはそう言つと、先程、陰口を言つていた男子の前にくると

ニコニと笑つて、クラスを出た

男子はやり過ぎた事を後悔し、女子はツカサに対し思いを寄せる子
が増えた

それから5組だけはスバルとミソラの関係に対しても

茶々はいれるが、嫉妬絡みの話は一切なくなつたらしい

ツカサはそれ程までに怖かつたのだろう…

「あれ？ なんでジャック委員長の鞄持ってるの？」

スバルがルナの鞄まで持っているジャックを見て尋ねる

「勝負に負けたんだよ」

実際に悔しそうに、ジャックは口にした

今回の成績は以下の通りだ

国語 数学 理科 社会 英語の順でいくと

スバル 88 91 95 78 75

ミンラ 80 82 90 72 83

ルナ 95 97 92 95 94

ジャック 91 95 92 91 90

ツカサ 94 83 79 86 95

キザマロ 93 96 90 90 91

そしてゴンタが… 35 0 (96) 45 52 38

結果、ルナは全教科においてジャックに勝利したのであつた

「ゴンタはやはり予想通りと言えば予想通りだが…数学は凄いだろ？

根本的な部分でやはり馬鹿だつたが…

「それじゃ、みんな、ばいばい！」

それぞれの家の方向へと別れる

ジャックは鞄持ちのため、ルナと一緒にだった

「なあ、なんでそんなに元気がねーんだ？」

ジャックはルナが明るく振舞っている事に気付いていた

「つ！」

ルナは驚いたが、立ち止まり、自分の想いを口にだした

「私…、あなたが家に居た時はとても楽しかったの

でも、あなたが元の家に帰ってしまった時に、とても…その、寂しかったのよ」

ルナは顔を伏せる

「私、もしかしたら…ジャック、あなたの事が」

ルナは意を決する

「ああ、ちょい待て」

ジャックがそれを遮る

「俺はな、ルナにいつも支えられてもううてるんだ
お前は自覚ないかもしれないけどな。

だから俺はルナの支えになりたいって思つてんのだ

ジャックはちよつと顔を赤くしながらルナを見る

「え、それって…」

ルナまで顔が赤くなる

「まあ、なんだ、その…、俺はルナの事が好きなんだよー。」

ジャックは言い切ると目線を外して、頭だけ横を向く

「ありがとう…」

ルナは嬉しくなつて涙ぐむ、ジャックはあの時と同じようにハンカチを手渡す

ハンカチを受け取り、涙を拭く

そして、ルナは精一杯の笑顔をジャックへとおくる

「お、やつといつもの顔だな」

ジャックは にしし と笑う

言葉には出でさず、ルナはジャックに近寄るとキスをした

数秒後、ルナはジャックから離れると

「覚悟なさい、私は我がままなんだから！」

ルナは頬を赤く染めながらビシツと指差す

突然の事に驚いたが、ルナの宣言にジャックは笑って応えた

「はいはい」

ルナはジャックの手を握り締めて、大きく踏み出した

ジャックは やれやれ。と思ったが手を強く握り返したのであった

第3・4話 僕は…（後書き）

はいってことでジャックとルナをくつづけてみました！
ルナにも幸せになつてもらいたいので！

まさかのゴンタは〇点でしたね
数学だけ勉強しまくつてその数学で馬鹿をじでかす展開にしてみま
した

感想待つてます！

第35話 暖暉（前書き）

原作に添つたキャラクターが大分崩れつつあります
キャラクター崩壊？が今後もあると思いますが
ご理解の程よろしくお願いします

「スバルの馬鹿……もう知らない！」

ミソラはそう叫ぶと部屋から出ていった

スバルはすっかり目が覚めていた

なぜこんな事になつたかと言つと、それは昨日の話に遡る

「スバル、明日デートに行こう!」

ミソラはテストが終わつたので、早速遊びに行こうとスバルを誘つた

「明日?」

「うん!」

明日からは土日、時間はたっぷりある

「ん、いいよ」

スバルは笑顔で答える

「やつた！ 私ね服見に行きたいの！」

ミソラははしゃいで、スバルの手を掴んで上下に振る

「うんうん、わかったよ

スバルはミソラの買い物に付き合つ事になつた

そして今日に至る、原因と言えば……、朝のことだらつ

「スバル起きて！ほら！」

ミソラは隣で寝てるスバルを揺すつて起こす

普段ならば、こんな事しなくても

起きるはずなのに今日はなかなか起きなかつた

「うーん……、もうひとつ……」

スバルは身を丸めて再び眠りに就こうとする

「もう！……スバル起きなさい！……今田はデートだよ！……」

ミソラはついにスバルの上に馬乗りになる

スバルの顔はしだいに苛立つを堪びてくれる

「うるさいな！眠いんだよ、もうひとつと寝かしてくれ！」

ついにスバルがキレた

上に乗つてゐるミソラを無理やり降ろす

ミソラは投げだされたような状態になつていて

最初は何が起つたのか飲み込めなかつたが、しだいに理解していく

そして…

今に至ると云う訳だ

スバルは完全に目が冴えていた

ど、どうじよひ…

いくら眠かつたとは言え、言い方がまづかつた

そしてなにより、ミソラは今日のデートを楽しみにしていたのだから

あんな風に言われたら、それは怒るだろひ…

「ロック…」

スバルはウォーロックに助けを求める

『今回ばかりはスバル、お前が悪いな』

スバルは打開策を考えるが、何も浮かばない

『まったく…、さつやとミソラに謝つて』

ウォーロックはスバルを指差す

「うん…」

スバルはリビングへと降りて行った

「奥さん、ミソラは…？」

ミソラの姿を探すが見当たらなかつた

「ミソラなら、さつき出ていったけど…、スバル何をしでかしたの？」

あかねは好奇心もあつたが、ミソラが出ていった事を心配して聞く

「いや、実は…」

あかねに事情を説明する

はあ…。頭に手を当てながら、あかねは溜息をする

「せつぞとミソラを追いかけて謝りなさい！」

ビシッ とあかねに言われる

「は、はい」

思わず背筋を伸ばすほど、迫力があった

スバルは慌てて、家を飛び出した

行き先は、展望台だ

きっと、アリーノンは居る。となぜか確信があった

展望台にて…

「ハープ、スバルは私が思つてゐるほど

今日の『テート楽しみにしてなかつたのかな』

ミンラは手すりに身を預けながら、ハープに聞く

『そ、そんなことないわよー!』

ハープは否定する

「でもスバルは、うるさこって言つて私を突き飛ばしたよ」

ミンラは悲しそうに話す

『そ、それは…』

さすがのハープも言葉がつまる

「私、スバルに嫌われたらどうしよう…、スバルがいなくなつたら

独りなつぢやうよ…』

『ソラは堪えていたが、ついに涙が零れてきた

『ソラ、スバル君はそんな子じゃないわ！』

「でも、でもお…」

ソラの場にペタッと座つたむ、涙はどうじん溢れてくる

拭いても、拭いても涙は止まらない

「ソラ

見つけた！

スバルは肩で息をしながら、ソラの元へと走る

ソラは泣いてる

スバルはソラを包み込むように抱きしめる

『ソラ、めんね』

スバルはソラを強く抱きしめながら耳元で謝る

「僕だつて楽しみにしてたの、ひつひつと笑つて突き飛ばしたりして

ミソラを傷つけた…、でも僕はミソラの事が好きなんだ

ずっと一緒に居たいんだよ」

スバルはミソラの涙を指で拭く

ミソラは今一番聞きたかった事が聞けた

「グス…、スバル、ホントに一緒に居てくれる?」

「絶対!」

「ずつとずつと一緒に居てくれる?」

「うん、ずつとずつと一緒に居る!..」

スバルを赤く腫れた手で見つめる

そして、ミソラはスバルにキスをした

名残惜しそうに離れるとミソラは再び抱きついた

「ミソラ、これからデートに行かない?」

スバルは自分の腕の中にいるミソラに聞く

「行かない」

え? スバルはミソラの返答ことまじつ

「今日ははずつといひしてみたいもん！」

『だとよ、スバル！』

ウォーロックが出てくる

『スバル君、今田は一田ミソカの四つ事聞いてあげてね！』

ハープまで出でくる

「わかつたよ」

スバルは了承した

「これくらい御安い御用だ

「ミソカ、それならベンチに座ろつよ」

スバルが立つて、ミソカの手を引いて立てるが

ミソカは動かない

「ミソカへ。」

「あはは…、立てないや」

ミソカはすっかり気が抜けて、立てなくなっていた

スバルは笑うと、ミソカの横で肩膝をついて

腰の下に手を潜らせる

よつと！ スバルはミソラをお姫様抱っこする

「え、ええ！？ す、スバル／＼」

ミソラはさすがに恥ずかしかつた

お姫様抱っこしてミソラをベンチへと降ろす

それから一人は手を繋いで、色々な話をした

「あー、スバルさ、私と結婚してくれるんでしょう？」

先程の事を思い出し、ミソラは嬉しそうに聞く

スバルは顔を真っ赤にしながら答える

「うん、ミソラが嫌じゃないなら結婚したい」

「えへへ、絶対だよ！」

ミソラは幸せそうな顔でスバルに身を預ける

スバルはミソラの肩に手を回すのであった

第35話 壁壁（後書き）

まだこれは一日の前半です
後半が待ってますよ、後半が！

第36話 ミンラのお願い

「 ものそろ帰らない? 」

スバルはミンラに聞く

かれこれ2時間近くスバルはミンラとベンチに座っていた

ミンラはスバルの肩に頭をのせてるので、幸せの真っ只中だらう

「 ん、 それじゃ帰ろつか 」

ミンラはベンチから立つて、スバルの手を引く

スバルは手を引かれたままに立つ

「あれ? そえばスバル、身長伸びたね! 」

ミンラはスバルの真正面にたつ

少し前まで、同じ目線ぐらいで話していたはずが

今ではスバルを少し見上げている

「え、 そう? 」

スバルは自分の頭に手をやる

「うん、 高くなってるよー 」

ミソラは ほらっと言つて自分の頭の上からスバルに向かって

水平に手を動かして比べてみる

前に比べた時よりも幅が広くなつていた

「ホントだ！」

スバルは喜んだ

どんどん男らしくなつてくなあ とミソラは思った

一人は手を繋いで家へと帰つた

「「ただいまー」」

「おかれり、ちゃんと二人で帰つてきたわね

あかねは心配はしていたが、だいじょぶだろうという確信があった

確信は当り、一人はずっと仲良くなつて帰つてきた

若いつていいわね～ なんてあかねは思つていた

「一人ともう飯はビうするの？」

「「食べるーー」」

一人は朝から何も食べていなかった

あかねは「コツと笑うとキッチンへと向かつた

朝ごはんを一人で仲良く食べた

「お母さん、聞いて聞いて！」

ミソラはとても嬉しそうな顔をしながら、あかねの元に行く

勿論、スバルを引き連れて

「スバルね、私と結婚してくれるんだって！」

ミソラは満面の笑みだが、スバルは赤面している

「あら！ そうなの、スバル？」

あかねも楽しそうに聞く

「うん、ミソラが嫌じゃないなら結婚したいな」

耳まで赤くしてスバルは答える

「えへへ」

ミソラはスバルに抱きつく

あかねはニヤニヤしながら

「良かつたわね、ミソラ！ スバルの事よろしくね」

「うん！」

二人は笑っていたが、スバルだけは真っ赤だったという

それからずーっとミソラはスバルに抱き着いていた

スバルはハープに言われた通り

ミソラのいう事を何でも聞いた

でもミソラは、じゃ、抱き着いていたい と言つだけだったので

結果的に夜までスバルはミソラに抱きつかれていた

「スバルかミソラ、お風呂に入りなさい」

あかねはリビングでくつついでいる一人に言う

「はーい、ミソラ先に入る？」

「ヤダ」

「え？ なら僕が先に入るよ？」

「ヤダ」

「…ヤダってビリするのさ」

スバルは戸惑う

「スバル、一緒に入る？？」

ミンラは恥ずかしがりながら言つ

え スバルは固まる

今、何て言つた？ え？ 一緒に入る？ いやいやいや…

ミンラの言葉が頭の中でグルグル回る

「スバル？」

固まっているスバルをミンラが呼んで現実に引き戻す

「つは、いやいやいや、ダメでしょ！」

スバルは赤くなりながら言つ

「私はいいよ？ スバルになら」

ミンラは頬を赤くしながら首を少し傾げて見つめてくる

ドクンッ

心臓が高鳴る

やば過ぎる状況だった

「つー、」「このお願いだけは無理！」

スバルは理性を働かして踏みどまる

「ふふ、冗談だよ！ 先にお風呂入って来るね」

ミソラは笑つて、風呂場へと向かった

危機は脱したが、かなり危なかつたスバルだった

その後、スバルも風呂へと入り、寝る事にした

「スバル、今日はまた、抱き締めて寝てよ」

ミソラは布団の中でスバルにお願いする

スバルは仰向けの位置からミソラの方を向き

ミソラに手を回して抱きしめる

「これでいい？」

「うん！」

ミソラはスバルと向き合つた状態でスバルに抱きしめてもらっていた
えへへ、嬉しいな～。ミソラは思わず笑みが零れてしまつ程、嬉
しかつた

彼の鼓動を、温もりを感じてられるのだから
ミフリは幸せを感じつつ、眠りについた

第36話 //このお願い（後書き）

感想等待っています！

第37話 夏といへば…（前書き）

また感想を返信できていらない分につきましても
この場を借りてお礼を申し上げます
応援してくれてありがとうございます！

第37話 夏といえば…

「スバル、早く早く！」

ミソラのソプラノボイスが急かしつける

「うんうん、わかったよ」

スバルは荷物を手に持ち部屋を出た

「あ、いこつか！」

スバルはミソラに手を差し伸べる

「うん！」

差し出された手を握る

「二人とも気を付けて行くのよ？」

あかねは、ふふっと笑う

「大丈夫だよ、それじゃ行つて来るね」

「楽しんできなさい」

「行つてきまーす」

一人は照りつける太陽の下、家を出た

「ふふ、ホントに仲良しね」

あかねは一人の背中を見ながら、呟いた

コダマ中学校も前期中間テストが終わり

長い夏休みを迎えていた

スバルとミソラは夏休みが始まつて早々に旅行に出かける計画を立てていた

何分忙しいミソラが唯一まとまって休みが取れたのが夏休みが始まる直後だったので

こうこうした事になつたのだった

行き先はベノサイドシティに新しくできた【ウォーターパーク】

なんでも日本一長いウォータースライダーが目玉らしい

旅行期間は2泊3日だが

泊まるのはミソラの家という事になつていた

「うわー… 大きいねえ」

田の前には異様に高くて長い滑り台が見える

ミソラは思わず見上げていた

「すごい大きいね、うん」

スバルもミソラと共に思わず見上げてしまった

「さすが日本一だね、早く滑りに行こつか！」

スバルはミソラの手を引いてパーク内へと向かった

夏休みに入ったばかりだというのに人は多かつた

パーク内へ入るためのチケットを買つたための列の最後尾は2時間待ちと書かれている

スバルは予めコネで特別券を発行してもらいつつ、

裏技を使用していたため、なんなく入れたのだが

他のお客さんに悪いなあと少なからず感じていたのは言つまでもない

パーク内は真ん中に大きな流れるプール

そして、そのプールを囲つように大きなドッグローライドを巻いた

ウォータースライダー

足場は南国をイメージした白い砂が敷かれていた

所々にパラソルとイスが用意されていた

「それじゃ着替えて」よつか。着替え終わつたらここに集合ね

「わかった！」

ミソラはニコッと笑うと更衣室へと向かつた

スバルは青い色の海パン、それに変装用のサングラス姿で出てきた

地味に引き締まつた肉体で、なにげなく腹筋が割れていたりする

中学生となりそれなりに身長が伸びたため、傍から見ると

それなりにカッコいい分類の男子に入るため

周りの女子がキャーキャー騒いでたりするのだが

スバルが自覚しているはずもなく

（なんか周りがうるさいけど、なんかあつたのかな？）

なんて思つてゐるのであつた

「よし！」

ミソラは着替えを済ませ、更衣室を出てきた

小花柄のスカートの水着で

白い肌に見事なまでに似合つた水着姿だった

サングラスと麦藁帽子を被つたその姿は

可憐としかいいうのない姿だった

(スバル褒めてくれるかな~?)

「『』しながらスバルの姿を探す

あ、いた!

ん? …なんであんなにキャーキャー言われてるのかな~?

確かにカッコいいけどさー、まったく!

ミソラは複雑な心境だったが、スバルの元へと駆けて行つた

「スバル」

スバルは呼ばれた方を向く

目に映るのは固まつてしまふ程、綺麗なミソラがいた

同じ女性であつても思わず振り向いてしまうような可愛さだった

(か、可愛すぎでしょ、これは…)

「えへへ、似合つがな？」

ミンハはその場でぐるりと回ってみせる

うわー… 周りからも声が漏れる

いつの間にか集まっていた視線

「ミンハ、すつごに似合つてるよー。」

「ホント…?」

スバルに詰め寄る

「ホントだよ！ うん、すつごに可愛いよ」

スバルは、ほんのり顔を赤めながら答える

「えへへ、よかつた！」

ニコッと満面の笑みを見せる

(可愛いなあ)

見惚れてしまう程の笑顔だった

「や、いじつか！」

スバルはミソラに手を差し出す

所がミソラは手ではなく、腕に腕を絡めてきた

「//、ミソラ//」

スバルは顔が赤くなる

「いいでしょー。」

スバルはミソラに引っ張られながらプールへと向かうのであった

第37話 夏といえば…（後書き）

久しぶりの投稿のため、変な部分もあるかもしませんが
よかつたら感想お願いします！

第38話 水遊び

照りつける太陽の陽光を水が反射し

水飛沫がキラキラと光り輝いていた

ミンラは浮き輪でプールの水の流れに身を任せていた

スバルはミンラの直ぐ脇を泳ぐ

「気持ちいいね～」

ミンラは太陽の光から田を庇う様に手のひらを掲げ、笑いかける
スバルは言葉に言いつのできない可愛さにドギマギしながらも応
える

「うん、気持ちいいね」

流石に水の中ではサングラスも帽子もつけないので

徐々にではあるが、視線が集まっていた

お忍びできている旅行を邪魔されるのも、あれなので

ミンラはスバルの手を引いて

ウォータースライダーへと向かつた

ウォータースライダーは

マテリアルウーブで形成された、透明な筒状となつてあり
中には水が流れていた

日本一長いこと言つだけあって、高さもそれなりにある

なんせ階段ではなく、エレベーターでの移動なのだから

スバルとミソラはエレベーターへと乗り込む

「あー、そえば、スバルって絶叫系苦手だったよね?」

「う、うん」

「ここ」のウォータースライダー結構スピード出る感じだけど、大丈
夫かな?」

ミソラはちょっと驚きの悪そうな顔を作る

「多分平気だと思つけど……」

引き攣つた笑みを作る

「なら平気だねー」

ミンラは陽気に係員の元へと歩き出す

はあ… 覚悟を決めよつ…

スバルはため息をつき、ミンラの後を追った

「お一人様ですか？」

係員のお兄さんが訪ねる

「あ、一人です」

ミンラは振り返ってスバルを見る

「お一人様ですね。それでは女性の方が前で男性の方が後ろで

腕を十字に組んで肩を掴んで下さー」

係員のお兄さんはテキパキと要領を伝える

入り口でスバルとミンラは腕を組む

「では、いってらっしゃいませ」

係員のお兄さんはニコッとしてスバルの背中を押した

「キヤーー（うわーー）」「

ジェットコースター程ではないが

筒状になつてゐるためカーブ等で

螺旋を描くよつに滑る

田まぐるじく景色が回る

ざつふん！

出口からスバルとミソラが飛び出される

ふはつ

水中から顔出す二人

目が合ひうど一人は笑いあつた

「おもしろーー！ スバルもう一回行こうづー。」

ミソラは楽しそうに笑いながら

スバルの手を引っ張る

「わかつたよ」

スバルは苦笑しながらも、手を引かれていく

「早く早く！」

ミソラに急かされエレベーターへと再度向かつた

その後合計6回乗り

文字通りクタクタになつたのは言つまでもない

田はすつかり傾き

プールの水面を茜色に染める

プールの中で水を掛け合つて いるカップルの水飛沫はとても綺麗だ
った

スバルとミソラはパーク内で昼食兼夕食を取つて

パークを後にした

第39話 久しぶりの家（前書き）

大変長い間更新をストップしておりました。
みなさま申し訳ありません。

久方ぶりにログインすると多くの感想が寄せられており、正直驚いております。

この場をかりてお礼を申し上げます。
新生活も安定してきたので亀更新ではありますが、更新をしていきたいと思います。

第39話 久しぶりの家

「ただいまー」

誰も居ない家にソプラノボイスが響く、続けて「お邪魔します」と声が続いた。

「うわー、久しぶりだなー」

ミソラは久しぶりの我が家を見直す。

長年一人で暮らしていた家。

母を「くじてからは、仕事、仕事の日々だった。

そんな毎日に嫌気がさして、彼に出会ったのだ。

自分の運命の人。

彼に出会ってから、毎日寝る前に彼の事を思い出して、眠りについた。

そう思うだけで胸が熱くなつて、嬉しくて、世界が色づいていった。

本当に彼に 星河スバルに会えてよかったです。

ミソラは胸に湧いたこの想いを言葉にした。

「ママ、私、今とても幸せだよ。毎日が楽しいよ

だから…心配しないで、私にはスバルがいます」

ミンラは笑つた。

幸せそうな顔に混ざつた、少しの悲しみをスバルは見逃さなかつた。

スバルはミンラを抱き寄せる。

「初めまして、星河スバルです。

こんな僕ですが、ミンラとずっと歩んでこいつと思ひます。

見守つていてください」

ミンラはスバルの言葉を聞き、嬉しそうに笑いながらスバルの胸に頭を預けた。

「約束だよ、スバル」

「うん、約束するよ。それにミンラには、僕だけじゃなくて、父さんや母さん

ハープにロック、それに委員長達だつて居るんだよ

絶対独りじゃないんだからね？」

むしろもう独りにはなれないよ」

スバルは「コツと笑つた。

ミソラは目に溜まった涙を指で擦り、赤くなつた目で精一杯の笑顔を見せた。

「うん、私はもう独りじゃない」

ミソラはスバルに抱きつき、スバルもまたミソラを抱きしめた。

外はすっかり暗くなつていた。

その暗闇の中を一際大きな星が2人を祝福するかのようにキラリキラリと輝いていた。

第39話 久しぶりの家（後書き）

久しぶりの執筆です、ぶっちゃけ文章が変わっている気がします…
久方ぶりの更新をした作者に感想をお待ちしております^_^

第40話 大切な場所（前書き）

更新が遅いですね…
申し訳ないです

第40話 大切な場所

「スバル、もう寝る?」

ミソラは着替えを済ませたらしく、見慣れたピンクのパジャマを着ていた。

「あ、うん、そろそろ寝よっか」

スバルは時間を確認すると、椅子から立ち上がりミソラに続いた。

「ママと使ってたベットで寝よっね」

ミソラは嬉しそうに笑う。

「僕はミソラと一緒にいるでも大丈夫だけど、その……いいの?」

スバルは部屋の前で立ち止まりミソラに問う。

「え、いいのって何が?」

ミソラはキョトンとした顔で聞き返す。

「ここはミソラとミソラのお母さんの大切な場所じゃないのかなって思つてさ」

スバルは部屋に置かれた大きなベットを見る。

綺麗に整頓された部屋で、白を基調としたデザインのベット。

ベットのサイドに置いてあるサイドテーブルにはお母さんとの写真と睡蓮が飾つてある。

「ここは確かにママとの大切な場所だよ、でもねスバルにも大切な場所にして貰いたいの」

ミソラはそう言つと部屋に入り、サイドテーブルに飾つてあった写真を手に取り

思い出に浸るかのように田田を細める。

「あのね、この睡蓮はママが大好きな花だったの

花言葉で『純粋な心』とか『信頼』って意味があるんだって

だからママはこの花を大切にしていつも私に正直でいなさいって

そして信じられる人ができたならその人を一生信じなさいって

だから私はスバルをここまで信じてる

この気持ちは変わらないよ

ミソラはどこか誇らしげに笑う。

その笑顔は睡蓮と相まってかとも綺麗だった。

「ありがとう、ミソラ。こつも僕を信じてくれて、僕もミソラを信じてるよ

スバルはへへっと笑いながら紅くなつた頬をかく。

「うん、さ、寝よう? スバル」

ミソラはスバルを招くように手を差し出す。

「うん、そうだね。……ありがと」ミソラ

ミソラの大切な場所に隣に居ることを許してくれて」

スバルはミソラの手を取り、近づいた時にそつと囁いた。

ミソラは紅くなつてから

「／＼／＼＼＼。スバルじゃないと嫌だもん」

そうスバルに聞こえるか聞こえないかの声で零した。

「ん? 何か言った? ミソラ」

ベットに入ったスバルはミソラの方を向いて首を傾げる。

「ん、なんでもないよつ おやすみスバル!」

ミソラはスバルの胸に顔を埋め、意識を手放した。

スバルもまた、ミソラの髪を手で梳き、満たされる充実感と併に眠りに落ちた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7792o/>

流星のロックマン～共に歩む道～

2011年7月21日18時08分発行